

未来の教育に関する考察（I）

太田 和敬*

A discussion of education in the future I

Kazuyuki OTA

More than 60% of jobs will apparently disappear within several decades because AI will take the place of many middle skilled occupations. Life-long learning will be indispensable to people who lose their job or who want to find a new job. Everyone must continue to learn in order to adjust to changes in society and the workplace. In addition, new models of literacy and competency, e.g. the Common Core and the Partnership for 21st Century Learning, are being explored by the OECD and some NGOs. Germany and the United States introduced national curricula although these curricula are not compulsory. However, those new models differ little from conventional theories and methods. This paper reviews and re-examines past educational theories of Plato, Locke, Rousseau, James Mill, Owen, and Dewey, and this paper looks at descriptions of the future by Thomas More, Orwell, Aldus Huxley, Toffler, and Keynes. New models are created by combining important elements of those theories. However, the most relevant issue when humanity is freed from long working hours is whether people want to use their free time in order to improve themselves or for leisure. In society of the future, development of humanity will be a serious task for schools and teachers.

Key words : 未来の教育、ユートピア、ディストピア、ナショナルカリキュラム、リテラシー、コンピテンシー

1. 未来の教育を考察する意味

1-1. 教育学的矛盾

教育は「未来を担う子どもを育てる」営みであるから、教育に携わる者は、常に未来の社会や教育について考えている。しかし、現在は、21世紀のグローバル社会における社会や生活を考える上で、更に特別な意味が付加されている。

第一に、人工知能第三の波といわれる時期を迎え、人工知能が多くの分野で実用化され拡大されると、将来無くなる可能性の高い職業が、様々な研究者から公表されるようになったことである。

小学校から「キャリア教育」の重要性が指摘され、将来の職業生活について小さい頃から考えさせる教育が行われているが、その子どもたちが実際に社会に出る頃に、その職業が存在しなくなってしまったら、そのキャリア教育は無意味である以上に、マイナスである。キャリア教育、あるいは社会に出る準備としての教育という概念は根本的に考え直さなければならない。

第二に、このような職業の再編成が起きるときに、必ず指摘されるのが、教育の重要性である。職業そのものが消滅し、新たな職業が生成してくるような、変化の激しいなかで、「変化に対応できる能力」、経験のない新しい事態に適応できる能力は、どのようにして形成できるのだろうか。又、再教育のための教育システムはどのようなも

* おおた かずゆき 文教大学人間科学部臨床心理学科

のであるべきかという制度論的な観点である。日本と欧米では、職業的再教育システムは、かなり異なったものだった。欧米ではOffJTが主流であるが、日本では、OnJTが主流であった。日本は変わりつつあるが、まだ欧米流の再教育システムは成熟していないし、日本的労働形態ではなかなか普及しにくい¹⁾。この点の未来の姿を模索することは、重要な課題だろう。

第三に、国際的潮流のなかで、先進国の教育は大きく変貌する過程にある。ひとつは、移民労働者・難民の大量流入によって、異質な文化的背景をもった子どもたちが、大量に先進国の学校に在籍するようになり、多文化教育などの対応が迫られ、従来の国民的教養に基づく教育は、もはや「古き良き時代」の産物になりつつある。絶えず新しい文化的背景の子どもがはいってくれば、(またそれは大人の再教育でもあるが)教育内容の柔軟性が不可欠となる。もうひとつの流れは、PISAを起点として生じた。PISAは、先進国が従来にはない製品やサービスを創り出し、知的優位性を保持することのみ、先進国でありうるという認識の下に、未来型の学力を形成するためにOECDが実施している学力テストであるが、先進国は国の成績に大きく左右されながら、自国の教育改革を進めている。そして、アクティブ・ラーニング、反転授業、ICTなどの授業方法から、PDCAといった学校全体の授業管理システムまで、新たな動きが生じている。しかし、それらが本当に意味のある新しい動向であるのかは、慎重な吟味が必要である。

しかし、上記のような切実な事態が進行し、未来社会を踏まえた教育を構想し、実践しなければならないにもかかわらず、特に日本での取り組みは遅々としたものでしかない。教育は、「過去」の文化を教えるものであった。現在でもヨーロッパのエリート中等教育機関では、古典が重視される教育内容であるし、一般的な学校でも、教えている内容は、既に評価の定まった文化的内容であり、未来に繋がる要素はほとんどない。教育内容は、既成の知識なのであり、教育制度の目的はその社会、特に政治的支配勢力の維持なのである。社会学で教育を「社会化」の過程と呼んでいるこ

とに象徴される。

従って、元来現存社会の維持を目的とする教育に、未来社会を切り開く目的を実質的に掲げることが可能なのかという、根本的矛盾を潜り抜けなければならないのである。

1-2. 21世紀教育構想の類型

20世紀末頃から、欧米各国は比較的似た教育改革に乗り出した。それは国民の学力を国家が向上させる施策をとることであった。サッチャーのナショナルカリキュラム制定が主なきっかけとなったと考えられる。戦後めざましい経済発展を果たした日本が、国家的な基準をもった教育政策を行っていることに習ったものだとされる。義務的な強制力はないにしても、教育の権限が中央の国家ではなく、州に分権化されていたドイツやアメリカでも「国家標準」の形で提案され、相当の州が実施に踏み切っている。更に、憲法で教育の自由を保障しているオランダでも、到達目標(Kerndoelen)という形で国が基準を定めるようになった。

アメリカ教育は、極めて多様な要素が絡まり、アメリカという括りでは整理できないし、また、多くの論争的な課題が存在している。教育は連邦の権限ではなく、すべて州の権限に属しているために、州ごとに学校制度も異なるが、他方、私立の学校は全米から生徒を集め、裕福な家庭を対象とした特別な教育領域を形成している。黒人差別の教育界への影響は、いまだに色濃く残っており、貧しい黒人が多く住む地域の教育環境の貧しさは、日本では想像ができないほどである。アメリカの大学は戦後国際的な高い評価を得て、世界中から留学生や研究者が研究や勉強のために滞在しているが、公立の初等・中等教育は水準が低いことがしばしば社会的な議論の対象となってきた。スプートニクショックや『危機の国家』など、アメリカの政治や経済の問題と絡めて、教育問題が国家的議論が巻き起こり、対策がとられてきた。スプートニクショックでは、高校段階の理科・数学教育の水準を引き上げること、『危機の国家』のときには、義務教育段階の教育水準をあげるために、現職教師の研修や、テストを媒介とした子

どもの学力向上が図られてきた。そして、21世紀になると、学力向上がより鮮明に打ち出され、そのための全国的な教育内容の基準がつくられるようになっていく。common core state standardsをつくっていかうとする活動である。これは2007年からCommon Coreという団体が作成のための活動をはじめ、2010年に最初の案ができた。英語、芸術、歴史、社会科学、技術を扱うものと、数学を扱うものである。ともに、全体的な概念と、小学校1年から高校3年までの国家標準が記されている。

読む、書く、話す、聴く、言語全体の原則を示しておく。

- ・独立性を示す
- ・強力な内容の知識を形成する
- ・聴衆、仕事、目的、訓練などの多彩な要求に応える
- ・理解するだけでなく、批判する
- ・証拠を大事にする
- ・戦略的に、また可能な限りテクノロジーとデジタルメディアを使用する
- ・他の見方や文化を理解するようになる

これらの原則は、全国的な標準として定められているが、前述した通り、アメリカは全国に対する権限をもった教育行政主体はなく、また、この団体も行政的な団体ではなく、私的な団体だから、強制する権限をもっているわけではない。従って、州や地域が内容をよしとした場合に採用される。Common Coreのホームページによれば、42の州が採用している²⁾。

ドイツには各州の代表者による教育会議KMKが開催されていたが、2004年に開催された会議では、2003年に公表された2000年PISAの結果を深刻に受け止めて、大々的な改革の議論を始めた。最初にだされたのが、各州に分権化されていた教育の標準を決めていく作業である。ドイツでは学習指導要領にあたる文書も、各州の権限だったから、各州内容も州で決めていた。それをかなり大綱的なものではあるが、全国的な標準Bildungsstandardを決めていくことであった。

では標準とは何か。

教育標準は、国際的に、教育システムのコントロールのための規範的な基準と理解されている。これらのコントロールがどれだけ関係しているか、あるいは、教授・学習の内容、条件結果に対して、あるいは、どれだけ水準要求（ミニマム、標準、マクシマム）に特化しているかに応じて、以下の標準で区別される。

そして、内容的標準（内容の標準、あるいはカリキュラムの標準）、教授、学習条件のための標準（学習標準の機会）、成績あるいは結果の標準（パフォーマンス標準あるいは出力標準）という柱からなる。

内容的標準がどの程度達成されているかは、全国的に統一的につくられたテストによって、標準の遵守が試験される。

水準要求に対しては、最小標準、通常標準、最大標準標準に分けられて、それぞれの学校のレベルによって使い分けられるように設定されている。ドイツの中等教育は、PISAショックのあと統合されつつあるが、まだ分岐的な制度として残っており、標準そのものがレベル分けされている³⁾。

こうした国家標準は当然、新しい学力モデルを構想する。21世紀の学力が国際的に意識されるようになったのは、PISAを通じてであった。PISAはそれまでの教科別の試験ではなく、数学的リテラシー、読解力リテラシー、科学的リテラシーという分類を用いている。リテラシーという用語を用いることで、知識の量や正確さを求めるよりは、問題以前の材料を多角的に解釈し、そこから問題を析出し、解決できる能力を試す問題をだすことで、新しい創造的学力を提起しようとしたのである⁴⁾。OECDは発足当初から教育調査や教育提言を積極的に行っており、21世紀になっても活発に提言や各国の改革支援を行っている⁵⁾。

OECDと並んで教育改革に関連して国際的な影響力を発揮しているのは、「21世紀の学習のためのパートナーシップ」（以下P21と略）である。この団体には、多くの企業が参加しており、また世界の多くの国で、この提示するプランによる実験的な教育が、その国の有力な学校で行われている⁶⁾。

P21によると21世紀スキルの中核は、Creativity, Critical thinking, Communication, Collaboration という4つのCである⁷⁾。

Creativity (創造性) は、先進国が不可欠とする「知的優位性」を実現する核となる能力・資質である。既存の技術は直ぐに後発国や企業に習得され、かつ改良技術として更に発展させられる。だから、これまでにない技術をもつことによってのみ、確実に優位にたてると考えられ、創造的な新しい技術を生む前提として、既存のものを批判的に検討する Critical Thinking を必要とするのである。

残りの二つは集団を前提とした概念である。

一般的に欧米の教育は、集団で協力して何かをする方式をあまりとらない。特にアメリカ教育のカリキュラムでは、「グループで説明、調整して意義を共有すること、問題解決のために協力体制をつくる能力を形成することには、ほとんど時間を使ってこなかった」とC Dede は書いている⁸⁾。そのため彼は、20年間チームに基礎をおいた教育を重視してきた。ただし、21世紀スキルとしては、コミュニケーションは、face-to-faceなものだけではなく、メディアを使ったグローバルなものではないと、協力関係も決して教室内だけではなく、遠隔の大勢の人たちとの協力構築の能力も重要となる。

P21は、OECDやCommon Coreよりも、もう少し包括的な21世紀スキルを提起している。

- ・キーとなる科目は、言語・芸術・数学・経済・科学・地理・歴史。
- ・リテラシーとして、市民リテラシー、健康リテラシー、環境リテラシー、情報リテラシー。
- ・学習と革新のスキルとして、創造的に考える、批判的に思考し、問題解決できる、コミュニケーションと協力のスキルがあげられている⁹⁾。

通常の教科を基本とし、そこに知識を活用できる能力として、各種の「リテラシー」を設定していることを加えていることが注目される。

更に評価を重視し、「グループの成果の評価」「個人の成果の評価」「スキルのグループ評価」「スキルの個人評価」と個人だけではなく、グ

ループの評価も提起している。

戦後先進国の教育内容は、系統主義と経験主義の争いが動いてきたといわれている。しかし、PISAやP21は、その融合と同時に新たな概念で21世紀の教育を主導しようとしているように見える。逆にいえば、これまでの教育原則を否定して新たな理念を提示しているわけではないともいえる。そこで、ここでは、21世紀の教育原則として提示されている内容の分析だけではなく、これまでの原則の展開がどのように反映されているかの検証も必要となる。

以上、大きな流れとして、先進国の教育内容の標準化、そして、批判的に吟味し、課題の解決ができるリテラシー、コンピテンシーが二つの柱として、掲げられていることが確認された。

1-3. 日本の改革意識

日本が21世紀構想を公的機関が公表したのは、1986年の通産省の「世界のなかの日本を考える—21世紀に向けての役割と貢献」と題する報告書が初期のものだろう。この時期の21世紀論は多くが国際化と情報化によって彩られていた。そして、次のような提言がなされていた。

- ・データベースなどによる教育情報の提供
- ・発展途上国の技術者を日本で教育・養成するような体制を充実させる
- ・英語教育の充実
- ・日本在住の外国人のための日本語教育、外国人子女の日本の学校教育への受入れ体制の整備
- ・日本の大学教育を受けることが国際的に高い評価をえられるようにする
- ・日本の国際化のための教育改革 学校の先生が外国経験を積む・帰国子女を活用・英語教育(コミュニケーション重視・ネイティブスピーカーの活用・早期化)
- ・中国語・韓国語などアジアの言語を学べる体制
- ・討論のない教育では国際人が育成できない
- ・教育人材の国際交流¹⁰⁾

国際化と情報化という未来像の中で、日本が国際社会の中で地歩を確保しつつけるか、そのため

の人材養成を留学と外国語の習得という軸で構想したものである。そして、90年代以降はバブル崩壊の経済が低迷した時期であったためか、政策的な未来構想はあまりなされなかったと思われる。

教育分野での21世紀を展望する政策は、1996年にだされた中央教育審議会の「21世紀を展望した我が国の教育の在り方について」が最初であろう。この答申は、ゆとり教育を一層進める内容を持ち、いじめや不登校、地域の教育力の低下等の問題に対応するために、地域と学校の連携を深め、つめこみ型の教育を改めることが主眼となったものであった。しかし、そのなかでも、21世紀の展望として、国際化・情報化・科学技術の発展に対応することが課題となっていた。その部分の目次は以下の通りである。

第3部 国際化、情報化、科学技術の発展等社会の変化に対応する教育の在り方

第1章 社会の変化に対応する教育の在り方

第2章 国際化と教育

第3章 情報化と教育

第4章 科学技術の発展と教育

第5章 環境問題と教育¹¹⁾

後述する10年前の通産省の答申の認識と、それほど違いはなく、当時の社会が国際化し、情報化されるという、外延的拡大のイメージで変化を捉え、そこで語学や情報機器の扱いに関する教育が中心となる点でも、通産省の認識と変わらない。「外国語教育の改善」「高度情報通信社会に対応する新しい学校の構築」「科学的素養の育成に関する教育の改善」などの提案がなされているが、実現しているとはいいいがたい。

堀尾輝久氏を中心となってまとめた『21世紀への教育改革をともに考える』（日本の教育改革をともに考える会 発行フォーラムA）という報告書がある。2000年6月に出版されたもので、「はじめに」によると、1997年2月に、日本の教育の現状に深い危惧の念をもつ者が手弁当で集まり、三年間にわたる研究・討議をかさねた成果であるとされている。報告書は、教育と子どもの現状を踏まえた改革提言であると評価しているように、徹頭徹尾「現状改革案」である。

見出しをみてみよう。

- 1 子どもの声からの教育改革とは
- 2 学校は変えることができる
- 3 生きる力と学ぶ喜びをはぐくむ教育課程の想像と学習の改革を
- 4 子どもたちに最善の教科書を
- 5 青年のゆたかな自律を支える教育の制度と社会的条件を
- 6 すべての人にひらかれ、社会の期待にこたえる高等教育を
- 7 すべての障害児にゆたかな学習と発達の権利を
- 8 乳幼児期のゆたかな成長と発達を
- 9 教育改革にジェンダーの平等の視点を
- 10 あの先生に会える
- 11 教育行財政の抜本的改革を
- 12 地域を子どもとおとなの「共育ち」の場に見出しで明確にわかるように、現状の問題点を、権利論の立場から洗いだし、権利を充足させるあり方を提示するという構成になっている。

もちろん、それは改革論の正道であって、間違いではない。しかし、『21世紀への教育改革をともに考える』という表題である以上、21世紀は、どのような社会となり、どのような人間が必要となり、教育がそうした人間をどのように育てるのかという視点が必要であろう。

この書物の最後の章として、「未来世代へのメッセージ」と題する部分がある。その趣旨を簡単に要約すると、

20世紀は科学と技術がめざましい発展をとげた時代であり、それが産業と結びついて人類の明日の反映を約束してくれるように思われたが、現実には、核兵器の出現、地球環境破壊、地球上の他の生命の生存を脅かす可能性を出現させた。かつて、人間精神の進歩への期待のなかで子ども世代は進歩を担う存在であったが、現在では手ばなしで人類の進歩を信じる者はいない。ふたつの戦争と核兵器・軍拡競争で、核・軍事力による戦争抑制と平和という神話、開発が進歩の指標となることの神話は崩れた。だから、国家主権・国民国家を対等平等で位置づけ、持続可能な開発・発展という新しい公共性に根ざす生活様式を創りだすこと、グローバリゼー

ション、情報化は国際金融資本の動きであり、先行き不透明の状況に陥っている。それに対抗して、民衆レベルの共同と連帯、そして、そのための教育改革を進めなければならない¹²⁾。

もちろん、ここに書かれた現状認識に、大きな異論を唱える必要は感じない。しかし、「現実」は、このような問題意識にもかかわらず進行していくのであり、その進行のなかに、未来の子どもたちは生きていく必要がある。そのための備えをしないという点で、真に責任ある教育改革案とはいえないのではなかろうか¹³⁾。

さて、中央教育審議会は、2016年5月に新しい答申を公表し、そこで初めて本格的な21世紀社会を前提とした教育改革案を提示した。これまでの中教審は、時の政府の政治的意向を反映する、政策追認型の答申をだすだけの機関だといわれても仕方ないものだった。21世紀社会を展望しなければならない時期にはいついた時点でも、21世紀に社会がどのようになるのかという見通しのないままに、学校で教える内容を決めてきた。その反映として、現状維持的な政策が軸となっており、国際化や情報化をいいながら、日本の伝統文化を前面に押し出すような原則を土台にしていたのである。しかし、2016年の中間まとめは、現在の教育では立ち行かなくなっている部分について、最大限のメスをいれようとしており、これまでの中教審の議論とはかなり異なっている感じを与える。人工知能が大きく騒がれ、社会生活のあり方を大きく変えるといわれ、半数の職業は消えてしまうという議論すらある中で、単に「伝統文化」を重視していればよいという姿勢では無理だと判断したのだろうか。

しかし、それにもかかわらず、この中教審の審議のまとめには、21世紀を開くには致命的な弱点がある。

第一は「批判的思考」という能力・資質を育てることを、全く無視していることである。21世紀の急激な社会の変化、技術革新の進展とは、今まで妥当していたことが、通用しなくなり、新しい状況が出現して、それをリードしていく必要があるという意味なのだから、批判的思考は絶対不可欠である。にもかかわらずこの答申は、すべての

教科に共通する資質・能力を示しているところで、次のように書いている。

②理解していること・できることをどう使うか（未知の状況にも対応できる「思考力・判断力・表現力等」の育成）

そしてそこには、3つがあると以下のように書いている。

- ・物事のなかから問題を見だし、その問題を定義し解決の方向性を決定し、解決方法を探して計画を立て、結果を予測しながら実行し、振り返って次の問題を発見・解決につなげていく過程
- ・精査した情報を基に自分の考えを形成し、文章や発話によって表現したり、目的や場面、状況等に応じて互いの考えを適切に伝え合い、多様な考えを理解したり、集団としての考えを形成したりしていく過程
- ・思いや考えを基に構想し、意味や価値を創造していく過程

これに対して「21世紀の教育のパートナーシップ」は、「批判的思考、問題解決、コミュニケーション、協力のような成功のための本質的なスキルを学ばなければならない。」とし¹⁴⁾、2032年を念頭にしたオランダの教育計画の文書でも「批判的思考」となっている¹⁵⁾。

つまり、「思考」には多くの場合「批判的」という修飾語がついているのである。これは単なる言葉の綾というレベルの問題ではない。社会が安定的な、変化の乏しい時代であれば、いくつかある考えのなかから、適切なものを選択し、それを実践してみて、次の課題を見いだすような循環もありうるだろう。しかし、激しい変化をともなっている時代では、前に存在していたものが、異質なものに、あるときには反対のものに置き換わっていくのである。それは自然に生じる変化ではなく、主体的に変革していく実践から生まれるのだが、その変革意識は、批判的思考から生じるのである。批判的思考をもっていない人間に、新しい社会を切り開いていくことは難しい。だから、欧米に限らず、未来を意識した教育改革のなかでは、かならず批判的思考力を育てることが重視されているのである。しかし、中教審の中間報告に

は、そういう意図は感じられない。

第二の弱点は、ICTを盛んに押し出しているにもかかわらず、それに不可欠な教材編成のあり方を無視していることである。日本の教材の中心は教科書であり、検定によって文部科学省の厳重なチェックが課せられている。そして、一旦決まると数年間は原則変わらない。しかし、3年経てば、社会には重大な変化がある。

本当に、激しい社会の変化に対応することのできる人材を育てる必要を感じているならば、そして、そこにICTを重要な教育手段と考えるならば、教科書検定制度は阻害要素でしかない。小学校に英語教科を導入する方針だが、マルチメディア時代に、検定教科書中心の英語教育の無意味さは明らかだろう。

マルチメディア機能を駆使した電子書籍から見れば、検定教科書をタブレットで見れるようにしただけの「デジタル教科書」は、本来のデジタル可能性を全く引き出していない。21世紀を開く人材育成に絶対不可欠であるが、「権力に不都合な要素」は、全く無視されているのである。

2. 未来研究の方法の検討

正確に言えば、未来のことは誰にもわからない。未来の最も確実な予想は、自分で未来をつくり出すことだという言葉もあるが、未来をつくり出せる天才は滅多にいない。だが、未来を予測するだけなら、正確さは保証されないが誰にでもできる。これまで多くの人たちが未来を予測する小説やエッセーを書いてきた。未来の予想はおおよそ3つのタイプに分かれる。理想形態で表現するユートピア、暗黒の未来を提示するディストピア、そして、過去からの流れを整理してその延長上に必然性として示す型である。

未来学者である浜田和幸は未来学の意味を基本的には望ましくない未来を回避するための準備作業であり、リスク回避という側面のほうが強くと書いている¹⁶⁾。

これは「ディストピア」がその典型といえる。多くの文学や映画のSFはディストピア風に描かれる。しかし、後で示すように、ディストピアと

して描かれる世界を、すべての人がネガティブに捉えるわけではない。また、逆にユートピア社会を全ての人が肯定するわけでもないのである。どちらにせよ、願望や恐れを軸として未来を描くものである。そして、実際に作品で描かれたことがらが、その後実現していることも少なくない¹⁷⁾。

しかし、未来を可能な限り正確に予想し、そのための対策をとるには、第三の方法が必要だろう。トフラーに典型的な手法である。ただし、分析が不徹底であると、予測も対策も外的外れになる。日本の通産省が1980年代に出した21世紀にむけた政策文書がその例である。『世界のなかの日本を考える－21世紀に向けての役割と貢献』には、教育に関連する内容として、次のような提言がなされていた。

- ・データベースなどによる教育情報の提供¹⁸⁾
- ・発展途上国の技術者を日本で教育・要請するような体制を充実させる¹⁹⁾
- ・英語教育の充実²⁰⁾
- ・日本在住の外国人のための日本語教育、外国人子女の日本の学校教育への受入れ体制の整備²¹⁾
- ・日本の大学教育を受けることが国際的に高い評価をえられるようにする²²⁾
- ・日本の国際化のための教育改革 学校の先生が外国経験を積む・帰国子女を活用・英語教育（コミュニケーション重視・ネイティブスピーカーの活用・早期化）、中国語・韓国語などアジアの言語を学べる体制²³⁾
- ・討論のない教育では国際人が育成できない²⁴⁾
- ・教育人材の国際交流²⁵⁾

1980年代だから、早い時期の議論であり、21世紀は産業や情報の国際化が進むので、国際社会のなかで日本が存在感をもって貢献していくには、何が必要かをまとめた文書である。そうした目的に規定されて、人材の国際交流とそのための英語教育の改善がほぼ全てといってもよい。

ここで提言されている内容は、教師を外国に派遣する事業、外国人子女の日本の学校への受け入れ事業等、21世紀も15年たった現在、あまり実行されているとはいえない。

英語教育の早期化は、外国語活動という形で取

り入れられているが、小学校における英語教育の体制が整ってきたとはいえない。ネイティブスピーカーの活用が、適切におこなわれているとはいえないからである。

また、大学における外国語教育は、2カ国語の必修だけではなく、そもそも外国語の必修すら不要となっている。多くの大学では英語が必修科目となっているが、それ以外の外国語を学ぶ学生は、それを専門とする学生以外には、極めて少なくなっている。

討論を主体とする授業は、小学校において言語活動なる領域で重視されるようになってきているが、実際におこなわれている授業での言語活動は、討論とはほど遠いものである。

教育現場では、この報告の趣旨とは逆に、教育基本法の改定なども影響して、国際化よりは国粋化が進行したといえるだろう。これは本来の合理的な予測というより、現状の問題の原因分析が不十分だからと考えられる。

2-1. ユートピア

2-1-1. トマス・モア

トマス・モア (1478-1535) は、イングランドの法律家、思想家で、ヘンリー八世に仕えて、大法官を務めたが、ヘンリー八世の離婚に発するイギリス国教会を、カトリック教徒として批判し、反対したために捕らえられ、処刑された人物である²⁶⁾。『ユートピア』はトマス・モアの最も知られた著作であり、理想郷の代名詞ともなっている。しかし、『ユートピア』は単なる空想小説ではないし、また、「未来の話」として提示されているわけでもない²⁷⁾。モアがアントワープに滞在中に、旅行家ラファエル・ヒュトロダエウスが訪れたユートピア島の様子を紹介するという、当時の現地報告の形をとっている。モアの意図は、当時のイギリス社会の不正を徹底的に批判することであり、その裏返し、つまりあるべき姿を、イギリス社会の反対の在り方をありうるものとして提示することにあつた。

ユートピアは政治や社会の仕組みが公正であるように構成されている。

(ア) 都市統領は選挙で選ばれる。

30世帯が1人部族長を選出し、部族長10人とその家族の上に部族長頭領がいる。民衆が、4つある地区から、それぞれ一人の候補者を選び、部族長が4人のなかから1人の都市統領を選出する仕組みである。統領は終身制であるが、ふさわしくないと判断されると失格する。部族長も統領も選挙制に依拠しているわけである。統領と部族長が3日おきに協議して政治を行う²⁸⁾。

「失格」事例と明記されているわけではないが公共の利益を顧みず、戦争のことばかり考えている王や²⁹⁾、単なる盗みでも死刑にするような不正な法³⁰⁾、飽くことのない囲い込みのような貪欲さやそれを容認する政治³¹⁾、こうしたイギリス社会への批判から想定される。こうした民主的な政治は、管理者たちだけを縛るのではなく、民衆もルールを守ることが義務付けられる。「良い君主が公平なしかたで発布したものであるか、または専制政治によって圧迫されておらず疑問でしばられてもいない民衆が集まって、その合意によって承認したものであるか、そのいずれであれ、快樂の素材たる生活必需品の分配に関してつくられた公法も同様に守られねばなりません。こういう法律を犯さないかぎり、自分の便宜について背理するのは懸命なことであり、さらにそのうえに公共の福祉を考えるのは、市民的義務意識のあらわれです³²⁾。」

(イ) 労働は全員で行う。

農業を全員で行い、その他に、毛織物業、石工職、鍛冶職、錠前職、大工職などを習って行う。(男女とも)技能なしの市民はいない。なまけものは追放される。ただし労働は1日10時間のみである³³⁾。つまり、労働は義務であり、かつ社会の基礎となる農業は全員が行うとしている。自らは労働せず、他者からの取奪で贅沢する人間は存在しない。

(ウ) 分配は平等に行われる。

私有財産が存在し、金銭の尺度で測るようなところでは、社会が正しく治められることは不可能であるから、物が平等に分配される。そしてその結果、みながなんでも豊富にもっている³⁴⁾。

これは以下のようなイギリス社会批判の裏返しである。

この嘆かわしい貧困、貧窮化に、度外れた浪費ぜいたくがまたどれほど貢献していることでしょう。貴族の従者たち、職人たちのあいだのみならず、農民のあいだでさえも、つまりあらゆる身分のあいだできらびやかな衣装や過去との美食がたぶんに見受けられます。それに加えて高給料理店、飲み食い屋、売春宿、それに売春宿と似たりよったりのバー、ぶどう酒店、ビール店があり、そのうえにさいころ、カード、すごろく、球あそび、ボーリング、鉄環投げというような多くのいかがわしい賭け事があります³⁵⁾。

(エ) すべての者が自由時間を利用して、好きな勉強をする。

多くの人は中休みの時間を学問のために使い、更に毎日早晩に公開講義が行われている。音楽、論理学、数学、幾何学などを学ぶのである。学問研究のために選抜された者は出席が義務であるが、他の人は自分の聴きたい講義を選択する。もちろん、もっと職業に励みたい人はそうしてもよい³⁶⁾。子どもの教育も重視されている。聖職者が子どもの教育を行い、学問、生活倫理、道徳を教える。教育は社会の安定のために有益と考えられている³⁷⁾。モアは、子どもに最悪の教育を与え、墮落するのを放任しておいて、子どもが悪行を犯すと処罰する。これは、泥棒を養成しておいて、それを罰するようなのだと批判している³⁸⁾。

他に興味深い点は、奴隷制であろう。しかし、通常の戦争奴隷や身分としての奴隷ではなく、犯罪者（現在の懲役に相当する）、他国で死刑判決を受けた者、他国での貧困から逃れるために、ユートピア国で自ら奴隷奉公を望む者から構成される³⁹⁾。現在の死刑廃止や懲役等の先駆的考えともいえる。さらに安楽死を容認している点である。本人の意思によるもので、安楽死を欲しない者に対して看護をおろそかにすることはないという限定が付けられている⁴⁰⁾。更にカトリック信仰の厚かったモアであるが、信教の自由が保障され、宗教的な精神から、看護、土木工事等の肉体労働がボランティアとして行われていると描写している⁴¹⁾。

2-1-2. ケインズ

ケインズは20世紀最大の経済学者の一人であるが、1930年に「孫たちの経済的可能性」という論文を発表し、100年後の状況を予想した。現在はまだ100年経過していないが、関連するいくつかの企画が現れている。ノーベル経済学賞を含んだ代表的な経済学者が、更に100年後の予想をするとか、あるいは、ケインズの理論の検証をするなどの企画である。それだけケインズの予想は、興味深い論点を含んでいるといえる。

その趣旨は以下のようなものである。

近代以前までに人類が使っていた技術は、ほぼ先史時代に発明・発見されていたもので、その革新は遅々たるものだった。しかし、近代の到来とともに、技術革新が起こった。それは南米からもたらされた金銀による資本の蓄積がきっかけであったが、以後急速に新しい技術が発明された。機械による失業などが起きるし、それは新たな社会への移行と調整期間であって、やがて経済問題は解決されてしまうだろう。

100年後、特に大きな戦争と爆発的な人口増加がなければ、人びとは一日3時間、あるいは一週間で15時間の労働で済むような経済力となり、たくさん余暇を楽しむことができるようになるだろう⁴²⁾。

ケインズは、経済発展の数値的な予想をたてており、それはほぼ近い数字で実現しているともいえるが、その結果生じる人間の行為について批判が集中した。実際に先進国ではなくても、1日3時間労働、あるいは週15時間労働が実現している経済圏は存在していないから、ケインズの予想が外れたことは間違いない。批判を整理してみよう。

- ・平均寿命が伸び、離職年齢が下がり、女性の労働進出が拡大した。これらはケインズの予想しなかったことだ。ヨーロッパでは労働時間をレジャーに振り向ける傾向が多少はあるが、アメリカでは労働時間そのものがケインズ時代よりのびている⁴³⁾。
- ・人はどうやって問題を解決しようかと考えるより、より多く効率的に利益をあげることを考えている。ヨーロッパでは貧しい人への援助意識が高いが、アメリカでは低く、援助の

多くは軍事援助である。ケインズはレジャーの価値を過大評価し、物の価値を過少評価した⁴⁴⁾。

・経済成長はしたが、経済の不平等は残っているだけではなく拡大しており、また人種、宗教、民族による差別も存在している⁴⁵⁾。

ケインズの間違った予想は何故生じたのかという点について、批判者たちは共通した認識を示している。それは、ケインズは、19世紀のイギリス上流階級の文化意識にとらわれており、それが普遍的な意識であると勘違いしていたというのである。だから、必要労働時間が減少すれば、そこから生じる自由時間をより人間的な向上のために使うとケインズは考えたが、特にアメリカ国民の多くは、豊かになればなるほど、より多くの富を得たいという欲求に動かされるのであるとする⁴⁶⁾。

しかし、これらの批判は必ずしもケインズを完全に批判したとはいえない。確かに労働時間の短縮は実現しておらず⁴⁷⁾、自由に余暇を楽しむ体制が広く普及しているとはいいたい。しかし、ケインズの予想はふたつの重要な前提を含んでいた。

第一は、予想が実現するためには、人口を抑えること、戦争や内紛を避けること、科学の問題は科学に任せる、生産と消費の差として決まる蓄積率であり、重要なのは先の三つであるとしていたこと⁴⁸⁾。戦後世界は戦争が絶え間なく起きているし、また人口は爆発的に増大している。これらはケインズの前提に反しており、経済成長が数字的に実現しても、人間の行動に別の要因となる可能性を否定できない。戦争と人口増加は、競争を激化させるから、そこでレジャーよりも労働を優先する志向が拡大していると反論することも可能である。ケインズは平和を重視する思想家でもあったから、この予想は平和の重要性を説いていると解釈できるのであり、この点に絡めたケインズ批判がないことは、批判が充分ではないことを示している。

第二に、余暇の増大という予想は、実は人間の本当の問題を提起しているのだという点である。ケインズの3時間労働説は、その程度の労働時間で済むという側面だけではなく、人間はまだ自由

時間をどのように過ごしていいのか、そのための能力を育ててこなかったし、また、ずっと昔から、働かねばならないという感覚を注入されてきたので、3時間程度の労働をすることで、安心感が得るという文脈で語っているからである。

つまり、ケインズが最も重要な問題として提起しているのは、自由時間を有効に活用できる条件をどのように形成していくかという点である。自由主義者は、自由が獲得できれば、それで人びとは幸福になると考えるが、自由を活用するためには、伝統的な価値観にとらわれているだけではなく、活用できる能力が必要であることを主張しているのである⁴⁹⁾。

現在の多くの国で、労働時間が短縮されていないのは、富そのものの価値付けと、それに基づく富の獲得者に多くが分配されるシステム（格差の拡大を産むシステム）の問題である。だから、分配が公平かつ公正になされれば、労働時間の短縮は十分に可能であるともいえるのである⁵⁰⁾。

トマス・モアとケインズには基本的なめざす価値に共通点が大きい。平和と民主主義、労働によって生活が成り立つこと、そして何よりも、労働時間以外を、学習などの自分を成長させたり、楽しんだりすることに使うという人間観である。そして、このことが最も人間の問題として重大なことだとケインズは指摘していた。21世紀が進み、人工知能が生活のほとんどすべての領域に使われるようになると、生活に必要な労働はより少なくなっていくと考えられるから、この人間観の問題は、更に切実に問われることになるはずである⁵¹⁾。

2-2. ディストピア

トマス・モアの生涯の親友であったエラスムス(1466-1536)は、ネーデルランドで生まれた人文主義者であり、ヨーロッパを広く渡り歩いた知の巨人である。EUが加盟国の大学間で、学生の相互留学制度を設置して、それをエラスムス計画と呼んだことでもわかるように、多様な要素を結びつける思想を徹底した思想家であった⁵²⁾。『痴愚神礼賛』はイギリス訪問中に、モアの邸宅で執筆され、『ユートピア』とは双子のような関係であり、共に当時のヨーロッパ社会の暗黒面を徹底的に批

判するものだった。モアが理想郷を描いたのに対して、エラスムスは、否定的な面を皮肉の手法をとり、ハナン・ヨランは『痴愚神礼賛』をディストピアの始祖として扱っているが⁵³⁾、暗黒の世界が描かれている部分は少なく、批判は直接的であり、異郷や未来社会として描いたわけではないので、ここでは詳細な分析は行わない。しかし、『痴愚神礼賛』は著者が生きている社会の徹底した批判であるという点のみを確認しておく⁵⁴⁾。

2-2-1. オルダス・ハクスリー『すばらしい新世界』

イギリスの小説家・エッセイスト、ハクスリーの未来小説である『すばらしい新世界』は、大戦間に書かれた第一次大戦によるヨーロッパの衰退・危機とナチズムの勃興という時代を背景に書かれたが、時代は2540年の出来事となっている⁵⁵⁾。

そこでは、人間はアルファからエプシロンまでの細かい階級に、生まれる前から選別され、すべて人工受精と人工胎内とで出産が行われる。アルファ階級では、ひとつの受精卵から一人が生まれるが、下の階級になるにしたがって、受精卵が分割され、同じ遺伝子の多数の子どもが生まれるようにコントロールされる。そして、生まれたときから、徹底した環境と刺激のコントロールで、それぞれの階級に余計な資質は排除され、必要な資質だけが伸ばされる。単純労働をする階級の者は、ひたすら単純な作業の繰り返しに苦痛を感じるどころか、喜びさえ感じるように調教される。

父親と母親という存在は死語となっており、家族というシステムは消滅している。

物語は、受精時のミスで変わり者といわれているバーナード・マルクスと、レーニナの恋愛が中心に物語が進むが、二人でアメリカの原住民の村にいったとき、新世界の責任者であるムスタファが、今はこの住民になっているリングダと彼女に生ませたジョンと出会う。二人をつれてロンドンに戻ったあと、ジョンとムスタファの「論争」が展開され、ハクスリーがこの物語にこめた意味が展開される。

未開社会で育ちジョンを産んだ経験のあるリングダは、この新世界への違和感をジョンに語る。

本当は誰もがみんなのもの、そうでしょ、そう

でしょ。でもここでは、それぞれがひとりだけのものなのよ。普通のやり方で関係を持ったら、不道德で反社会的だと思われる。憎まれて軽蔑されるの。ずっと以前には何人もの女がここへ押しかけてきて大騒ぎしたわ。この女たちといたらひどいの。頭が思いっきりおかしくて残酷なの。もちろんマルタス処置のことなんて何も知らない。墮で胎児を育てるとか、そういうことは何一つ知らないの。だからポコポコ子どもを産む。犬みたいに。もうむかむかする⁵⁶⁾。

瀕死状態になったリングダに大量のソーマを投与しようとする医者に、ジョンは当初反対するが、結局押し切られる。そしてリングダは死に、ジョンはソーマを自由を抑圧するものとして投げ捨て、警官に逮捕されてしまう。そして、ジョンと支配者ムスタファの論争となる。

ジョンは、新世界で鑑賞されている触感映画を批判する。シェイクスピアのオセロの方が優れていると。

ジョン「オセロはすぐれた作品です。あの触感映画などよりいいものです。」

ムスタファ「もちろんそうだ。しかし、安定性を得るためには代償を支払わなければならない。幸福か、かつて高度な芸術と呼ばれたものか、どちらかを選ばなければならないんだ。われわれは高度な芸術を犠牲にした。かわりに触感映画と芳香オルガンを選んだ。」

ジョン「でもあんなものは無意味だ」

ムスタファ「いや、あれはあれなりに意味があるよ。みんなを気持ちよくしてくれる。」⁵⁷⁾

過酷な単純労働を非難するジョンに、ムスタファはこたえる。

ひどい仕事？しかし彼らはそう思っていないよ。逆に好んでやっている。楽だし、子どもでもできる単純なものだ。頭脳にも筋肉にも負担が少ない。さほど疲れない作業を七時間半やれば、ソーマがもらえて、ゲームや制約のない性交や触感映画が楽しめる。これで何が不足なのかね。労働時間の短縮は望んでいるかも知れない。そして、もちろんその短縮は可能だ。すべての下級労働を一日三、四時間にするのは、技術的に

は簡単なことだ。しかしそれで彼らがより幸せになるのか。ならないね。その実験は150年以上前に行われた。アイルランド全土で四時間労働制がとられたんだ。その結果は、社会不安が生じ、ソーマの消費量が大幅に増えただけだった。余分に増えた三時間半の余暇は幸福の源泉とはほど遠く、みんなソーマの休日をとらずにいらなくなってきたんだ。・・・労働者に過剰な余暇を与えるのは残酷なことだからだ⁵⁸⁾。

そして、ムスタファが、文明には、高貴なことも英雄もいない。それがいるのは戦時だが、今は平和で、快樂を求めることができるのだから、葛藤などもない。昔は忍耐が必要だったが、今はすぐソーマが解決してくれると述べる⁵⁹⁾。「快適さなんてほしくない。欲しいのは神です。詩です。本物の危険です。自由です。美德です。そして罪悪です。」というジョンの言葉に對話は次のように進む。

ムスタファ「要するにきみは、不幸になる権利を要求しているわけだ。」

ジョン「ああ、それでけっこう。僕は不幸になる権利を要求しているんです。」

ムスタファ「まあ、ご自由に」⁶⁰⁾

ハクスリーの描くディストピア社会は、出産から死までが管理され、意識や価値観までもが睡眠学習等による強力な外部注入による教育で統制される。しかも、親による生まれの偶然性はなく、初めから階級が決定されている。従って社会内部の矛盾や葛藤は存在せず、個人は快樂を抑える必要がない。そこに何か葛藤が生じれば、ソーマという薬物を飲むことによって、心の苦悩はすべて消し去られる。つまり自由意思による選択を徹底排除した世界なのである。ジョンが苦し紛れに主張する「不幸になる権利」がそれを逆照射している。トマス・モアやケインズは、労働時間が短縮され、自由時間が増えれば、自己を向上させる活動を人間はするものだと考えたが、ハクスリーは、単純労働に慣れた人間は、単純労働をやり続けることを欲すると考えた。

2-2-2. ジョージ・オーウェル『1984年』

ジョージ・オーウェルの『1984年』は、最も有

名なディストピア小説で、しかも、既に予言の1984年を過ぎているから、検証することも容易であり、この時期の前後に様々な議論がなされた⁶¹⁾。

ハクスリーの『すばらしい新世界』と同様に、徹底した管理社会として未来の暗黒を描いているにもかかわらず、管理社会の性格は正反対である。

ここでは絶えず戦争が繰り返され、市民生活が監視されている。テレスクリーンという双方向テレビとマイクが至るところにしかけられていて、行動が逐一記録され、チェックされる。ロンドンに住むスミスは、記録を扱う役人であるが、次第に疑問が湧いてくる。ある日若いジュリアから告白され、やがて愛し合うようになるが、現体制への疑問を密告され、逮捕され、拷問を受ける。

ハクスリーは第一次大戦を経験したあとの社会のなかで書いているが、オーウェルは、ナチズムやスターリン体制、そして、自らスペイン市民戦争に参加した経験を踏まえて、管理社会のあり方を提起している。ハクスリーは、睡眠学習などの刷り込みで人を形成し、欲望を解放し、葛藤は薬で解消してしまう。だから、およそ社会体制への疑問などが生じないシステムを想定している。そのなかで、自分の行動を意識によって自由に選択していくことなどは、まったく考えられない人びとが生活しているが、そこには歴史そのものが存在しない。

他方オーウェルの描く世界は、行動や意識は監視され、恐怖によって自由な行動が抑制されている。しかし、そこには「歴史」が存在しているが、主人公は歴史の改竄を担当する役人である。しかし、改竄作業のなかで決して容認できない事実を発見し、体制に疑問をもってしまう。そこから、監視の目を回避しながら、恋人との逢瀬を重ねるが、そのこと自体がリスクを負っている。オーウェルはおそらくスターリンが同志たちを粛清した裁判を念頭に置いているのだろう。スターリンによって裁判にかけられたボルシェビキたちは、最終的には、自分の罪を積極的に認めて、その上「ソビエト万歳」を叫んで処刑されたといわれているが、結局死刑判決を免れない主人公のスミスは、「彼は巨大な顔を見つめた。あの黒い口

髭の下にどんな微笑みが隠されているのか知るのに40年もかかった。なんと悲惨で無意味な誤解をしていたことか！ジンの匂いのする涙が二滴、彼の鼻の横を流れた。しかしもう大丈夫。全てがわかったのだ。苦闘は終わりを告げた。彼は自らを克服することができたのだ。彼は今、ビッグ・ブラザーを愛していた。」と表現されて、この小説が終わるのである。

オーウェルの作品は、現在では既に実現した管理社会を的確に予言したもので、ディストピア小説の最も優れた例として評価されている。オーウェルの生きたイギリスは、現在防犯カメラが最もたくさん設置されている社会として有名である。その管理的側面が批判されることはあるとしても、犯罪を予防し、また起きた犯罪の犯人を摘発する手段としての有効性を市民の多くが支持しているからこそ、発展した仕組みであると考えざるをえない。ケヴィン・ケリーは、インターネットそのものが個人々の活動の詳細な追跡を行っているものであり、インターネットがIoTという形で更に発展すると、個人の生活の隅々まで記録され、参照される。防犯カメラとは比較にならない追跡社会であるが、ケリーは、それをインターネットの肯定的な側面として描いている⁶²⁾。また、ハクスリーの描く更に遠い未来では、女性は妊娠出産の負担から解放され、トラブルが起きようがない社会の仕組みになっており、たとえ起きたとしても薬が全てを忘れさせてくれる。人びとは何も考えないで済み、学ぶべきことは睡眠学習で努力せずに注入される⁶³⁾。こうした社会が、完全にネガティブな社会と理解されるかどうかは、やはり、「人間観」によるのではないだろうか。

2-3. トフラー

これまで紹介した未来予測に基づいた作品は、自己の関心領域を中心に、その時代への批判意識を未来構想に反映したものである。しかし、トフラーの未来予測は、歴史的な事実の展開の方向の先にあるはずのものを予測する。そこには、彼の価値観の立場にそって予測内容を変換することが、ほとんどないといえる。

では、トフラーの注目する「変化の方向性」と

は何か。

トフラーは近代社会になってからの変化の特質をまず次のように析出している。

- ・加速的推進力（変化の速度がどんどん速くなっている。）⁶⁴⁾
- ・生活のペースが速くなる（生活上の時間と距離が短縮される。）
- ・一時性（物を使い捨てる社会になる。）⁶⁵⁾
- ・あたらしい遊牧民（住居や職場を移動する頻度が多くなる。）⁶⁶⁾

トフラーによれば、定住は農業社会における居住形態であり、第三次産業が主体となる現代では、むしろ移動が通常になる。

- ・モジュール人間（生活のなかで様々な組織に関わり、それぞれ別の人間関係を結ぶ。）

わずかな人びとと全体的な人間関係をかつては結んでいたが、それは社会的契約、性的習慣、政治的・宗教的制限などで締めつけられていたものであり、モジュール人間では、仕事、趣味、地域など別々の人間関係を結ぶようになる。人間関係の平均的持続期間が減少し、数量は増大する。組織のトップも経験より専門的知識が重要になり、更に人間レンタルサービス会社が現れるとする⁶⁷⁾。そして、特にリーダーたちは、生まれついた生活様式とは全く違ったものに自分をあわせるために、これまでの生活形態を捨ててしまう⁶⁸⁾。

- ・アド・ホクラシー（目的実現とともに順次組織がスクラップ・アンド・ビルドされるあり方）

それまでの官僚制では、個人はヒエラルキーに組み込まれ、仕事の一部をするのみであり、組織は永久的なものと考えられている⁶⁹⁾。しかし、アド・ホクラシーでは、プロジェクトやタスクフォースなどのやり方に変化し、組織で働く人は、組織に忠誠心をもつのではなく、専門に忠誠心をもつようになる⁷⁰⁾。

以上のような基本的な社会のあり方の変化を前提に、更にトフラーは「未来の衝撃」を表す新事態を多く提示している。

ますます激しく変化する科学技術や社会のあり方に、適応していくこと自体に、非常に大きなエネルギーを要するようになり、少なくない人たち

が拒否反応を起こすようになる。人間の頭脳は、新しい可能性に目をつぶり、現状に安心するために関心の分野を狭めてしまう。そうした事例としてトフラーは、次のような事例をあげている。

- ・ライト兄弟の飛行機が成功したとき、新聞はその報道を拒否した
- ・「馬のひかない車など考えるひとは頭が弱い」とある評論家がいった6年後に100万台目の車がフォード工場から出荷された
- ・ラザフォードが原子核のエネルギーは絶対爆発しないと断言して9年後に実現した⁷¹⁾。

クローン人間、胎児の冷凍保存、死後の脳の生存など、人間の生命についても全く以前は創造すらできなかったことが可能になるという⁷²⁾。

こうした生命科学の進展は、生命倫理に関する大きな論争課題となっており、まさしくトフラーのいうように「衝撃」が生じているわけである。

次に家族のあり方が根本的に変化する。トフラーがあげているのは、移動性の高い核家族が主流になることの次に、子どもを生まない、あるいは出産を遅らせる傾向が強くなる、生む親と育てる親が同一である常識が崩れ、一方しか行わない親が生じる。そして、同性の夫婦ができるなどの例をあげている⁷³⁾。これらは、現在すべてが実際に起きている現象である。

あらゆる側面での多様化が進み、それに応じて「選択」の機会が激増する。しかし、この社会の多様化は個人としての画一化、あるいは部分化を示すものであり、逆に個人として一個の人間として扱われたいという要求が起きる⁷⁴⁾。変化に対応したり、あるいは選択の機会を積極的に活用できる人間と、うまく対応できない人間に分かれ、後者は様々な身体的、心理的なストレスやトラブルを負うことになる。

産業社会が画一的な学校システムをつくり出し、科学技術革命によって画一化は打破され、一人一人が異なる教育過程を辿る、しかもそれは2000年になる遙か前に実現するとトフラーは書いている。

2000年に達するはるか前に、学位、専門科目、単位といったような古びたやり方はすべてすたれきってしまうに違いない。そして、学生の誰

ひとりとして同じ教育過程を歩むものはいなくなるだろう。というのは、学生たちは現在、高等教育から画一化を除き、そしてまた、超産業的多様性をもつように圧力をかけているからだ。そして、その戦いには学生が勝つだろうと思われる。(中略) アメリカでは学校制度は強力な均質性をもたらす力となっていた。全市的標準としてのカリキュラムを定め、教科書と教職員とを市単位で選定することにより、学校制度は学校に対してかなりの均一性を強要してきた⁷⁵⁾。

トフラーは、停滞的な社会では伝統文化を学ばせるのがよく、マスプロ教育は、産業社会に適応させる子どもを育てるのに好都合だった。屋内での繰り返し作業、煙、騒音、機械、密集した悪い居住、集団規則 これらは工場での生活に適合させるものだが、科学技術の発展がそれを壊してしまうと分析する⁷⁶⁾。デューイはそうした過去を変える試みをしたのであると評価し、これから必要な教育は「対応能力を高めること」「変わることへの判断能力」を育てることとする⁷⁷⁾。

学校では絶対に必要なことだけを教え、学校以外の教育機関も認め、生徒には選択権が与えられるべきとする。必要な能力は、情報を自分で処理して、自ら学ぶ能力を身につけることであり、明日の文盲とは、読むことのできない人ではなく、学ぶ方法を学んだことがない人のことになる⁷⁸⁾。

トフラーのこのような考えは、実際の学校としてはサドベリバレイに近いといえる。教育に関する限り、トフラーの予測はあまりあたっていない。それは、教育が基本的に社会の現状維持機能をもたされているからであり、既知の知識を教えることが圧倒的な部分を占めているからだろう。

先述したケリーの未来予測は、基本的にトフラーと同じであるが、彼は既に生じている経過として未来を予測している。その鍵概念は、「なっていく」「認知する」「流れていく」「映写される」「接続する」「共有する」「選別する」「再合成する」「交流する」「追跡する」「質問する」「始める」の12の現在進行形の現象である⁷⁹⁾。

3. 未来考察のための伝統的 教育理論の再検討

未来論はどの型も、何らかの教育、人間形成の特別なあり方を提示していくことが確認できた。しかし、ディストピアは、物言わぬ従順な人間を作ることを主眼として教育を描き、逆にユートピアは、人々が理想的に向上心をもっていくという前提で教育が表現されている。これまでの多くの優れた教育理論は、ユートピアと同様な志向性をもっていた。

19世紀までの教育論は、特定の個人や特定の階層を念頭に書かれたものであり、その当時の人びと一般を想定して書かれたものではない。従って、いかに優れた教育論であっても、対象となる層には妥当しても、他の層は考慮されていないし、ましてその教育論に従って国民全体のための教育実践が行われたわけでもない。しかし、それにもかかわらず、教育理論には、いかなる時代に書かれたものであっても、共通点があるといえる。書かれた教育論は、支配者あるいは支配者を助ける上級階層（聖職者、法律家）の教育を想定しており、それ故に共通の性質をもったのである。それは最も優れた人物を育てるための教育を考察したことからくる共通性である。

では、それは現代の民主主義社会では意味のない理論なのだろうか。

もし、その理論が王や貴族のためにだけ有用であり、それ以外の人びとを排除する論理を含むものでなければ、経済や政治が発展して、多くの人々が教育を受けるようになったとき、その原理を拡大して適応することができる。

そうしたことを具体的な理論に則して検討していこう。

3-1. プラトン

プラトンの教育論を検討するためには、4つの点の確認が必要である。

第一に、プラトンは自分の創設した学校であるアカデメイアでの教育実績があり、そこでの実践のスタイルが、すなわちプラトンの教育論だということ。

第二に、アカデメイアの教育は、プラトンだけではなく、何人かの教える立場の者（たとえばアリストテレス）がおり、プラトンの教え方あるいは教育実践の関わりかたは、他の者と違って、講義スタイルではなく、対話スタイルであり、それは、ソクラテスを登場させた対話編がその実例を示していること。

第三に、『国家』の中で、統治者にふさわしい人物を育てるための教育論を展開していること。

第四に、プラトンの時代に「学ぶ」者は、労働から解放された自由民であること。

プラトンの最も基本的な教育論は、通常「洞窟の比喩」として語られる⁸⁰⁾。ソクラテスによって語られることは、教育とは知識を外から与えることではなく、中にある素質を引き出すことである⁸¹⁾。

しかし、プラトンが創設したアカデメイアでは、ほとんどの授業は講義型であったとされる。アリストテレスの文献は、出版されたものではなく、講義録として残されたといわれており、知識を伝達することが、アカデメイアでも基本的な授業形態だったわけである⁸²⁾。従ってプラトン自身は行わなかったとしても、ソクラテスに語らせている問答にもかかわらず、知識伝達型の講義形式を十分効果のあるものと認めていたわけである⁸³⁾。

しかし、プラトン自身が最後の段階として認めていた教授法は、対話法であった。ソクラテスの言葉として、「その真実は、ただ哲学的な対話・問答の力だけが、いまさきわれわれが述べたような学問に通じている者に対して、これを啓示することができるのであって、それ以外のいかなる方途によっても不可能だということ、このことはどうだろう。」といわせていることでわかる⁸⁴⁾。

アカデメイアの教育は、プラトンが『国家』で描いた統治者のための厳格なものと同等であると説く説を、廣川氏が否定し、より緩やかなものだったとする。聴講者は、将来の統治者候補という者に限定されていたわけではなく、初等教育レベルの知識を獲得している者は、それほど制限をつけずに受け入れ、プラトンの時代には授業料も徴収しなかったため、貧しい学生も存在した⁸⁵⁾。しかし、教授内容は、『国家』で提示したものに近かったようだ。『国家』に書かれた科目群は以

下の通りである。

準備科目として、算数、平面幾何学、立体幾何学、天文学、音楽理論、それを終えたものが、哲学的対話、哲学的問答法の学習と研究ができる。

17、18歳までに強制的ではなく自由に学習する

20歳までに強制的な体育

20-30にばらばらだった数学を全体的に学ぶ

30-35選ばれたものだけが哲学的問答

35-50公務につく

50以後は優秀なもののみ哲学研究と国政⁸⁶⁾

このような教授プランを実行し、成果をあげた者が統治者として選出されていくことをプラトンは期待したのである。

ここでの重要な点は以下の通りである。

第一に、人間の能力は予め人間の中にあり、それを引き出すのが教育であり、外から知識を与えるのではないという点。これは逆にいえば、教育の本質は知識の伝授ではないことも意味しているといえる。

第二に、その引き出す手法は、対話・問答であるという点。プラトンは「国家」の中で、哲人政治家に必要な科目等を示しているが、やはり、最も重要な教育理論は、問答によって知的能力を引き出すということにあるといえる。その具体的な例が、プラトンの膨大な著作そのものなのである。アカデメイアでの教育がどのようなものであったかは、詳細には明らかではないようだが、廣川氏の研究によって、重要と思われる点は明らかになっている。

プラトンは通常の意味での知識伝達的な「講義」を行ったことは、アカデメイアでは一度しかなかったそうだが、それは失敗であったと評価されている。しかし、他の講師たちは、「講義」をしていたし、講義が土台となって、更に知的な教育として、対話・問答法があったといえる。そして、更に重要なことは、問答においては、プラトン自身の説に対しても、自由に批判が許されていた。

そして、プラトンの教育対象は、かなり広いものであり、そこから優秀な者が選抜されて哲人統治者となる構想であるから、民主主義的選抜の理念があったといえる。

3-2. ロックとルソー

ジョン・ロックの教育論について、ここでは「二重制度」について考えておく。周知のようにロックの教育論は、ジェリントリー層の子どもの親や家庭教師が教育をする場合の注意を書いたものであり、一般的な意味での教育理論を構築しようとして書かれたものではない。個人的な教育書だから、現代にも通じる提言が多数ある。「毎日冷水で足を洗う」「衣服は窮屈でないものを」「食事はあっさりとした簡略なものを」「睡眠は十分に」。最も現代の常識からみると、疑問の湧く言葉もある。「食事時間は一定でないほうがよい」「子どもの飲み物は弱いビールだけ」。イギリスでは、比較的最近まで子どもに飲酒させる風習があったとされるので、当時は普通だったのだろう。

ロックの教育論は、このような教訓を教育の広範な場面に対して述べたもので、子どもを尊重し、しかし、細心の注意を払って導くような指導を提示している。恵まれた環境にある子どもの教育として、多くは今でも妥当する内容だろう。

しかし、他方で、ロックは貧民救済の手段としての教育構想を提起している。

ロックの案は以下のようなものである。

- ・健康な心身をもつ14歳以上50歳未満の男は、許可証なく自らの教区外に出て沿海カウンティで物乞いを行えば、(中略)身柄を拘束されるものとし、(略)貧民保護官の前に連行されるものとする。
- ・そこで3年間重労働に従事させられるべきこと。
- ・治安判事は明らかな改善を示すまでは、誰も解放してはならない。
- ・許可証を偽造したものは、片耳を失うものとする。
- ・14歳以下の女で、自らの教区外で許可証なく物乞いを行っているところを発見された場合には、(略)自身の教区に連れ戻される。
- ・14歳以上の女が法定許可証なく、同じ悪事を働いているところが二度目に発見された場合には、(略)矯正院に装置し、3カ月間重労働に就労させる。

- ・14歳未満の男子、または女子が、居住する教区外で物乞いを行っているところを発見された場合には、(5マイル以内であれば) 至近の就労学校に送致されるものとし、そこにおいて十分に鞭打たれた後、その夜のうちに居住地に到着するべく解放するため、夕刻まで就労させるものとする。5マイル以上の場合、六週間の間、およびその終了後は次の四季裁判所の開廷までの間、就労させるものとする。
- ・労働を拒むものは矯正院に送致されるものとする⁸⁷⁾。

当時エリザベス救貧法といわれる法があり、各教区は労働可能な男性に仕事を与え、最低限の生活保障を行う義務があり、救貧税を徴収することがあったが、ロックの案は、教区を統合し、かつ就労学校を機能させようとしたものである。

貧困の増加は、規律の弛緩と風紀の頹廢のためであり、物乞いなどを取り締まるとともに、彼らを就労させることが、社会の負担を軽くし、かつ悪徳をなくす上で有効だと、ロックは考えたのである⁸⁸⁾。

教区の税で扶養される貧民の大多数は、生計を立てるのに役立つことを行う上で、完全に無能でもまた完全に意欲を欠くわけでもありません。しかし、そのような者たちでさえ、適切な仕事をあてがわれなかったり、熟練度が低くて公的に有用な仕事をまともに行えないために、教区の給付にすがって無為に暮らしたり、あるいは、それ以上の悪事とまでは申しませんが、物乞いをしたりするのであります⁸⁹⁾。

このような認識の下に、就労学校が各教区に設立され、3歳以上14歳未満の者で、貧民監督官からの給付で生活している者は、就労学校にいく義務を負わせるのが、ロックの案である。それはまた、母親を子どもの世話から解放し、労働の自由を得させるのに役立つとロックは考えた⁹⁰⁾。そして、これは当時の給付が親になされるために、親が居酒屋で飲んでしまうことが多く、実際に貧困を救う結果をもたらさないことが多いことを考慮して、子どもを就労学校にいれることによる費用として抛出すれば、実際的な効果が大きいという理由もあった⁹¹⁾。

更に、職人に対して、徒弟として無償で就労学校から受け入れることを義務としている。また、就労学校は成人に対しても開くとしている⁹²⁾。

こうしたロックの議論には、支配層と貧民に対する全く別の教育を想定する二重基準であるという批判が行われてきた⁹³⁾。確かに、『教育に関する考察』と「救貧法論」における教育は全く異なっている。だからといって、ロックが本質的に二種類の人間を想定して、別々の教育を考えていたと断定することはできない。救貧法論は、あくまでも実際にいる貧民、物乞いで生活している人びとを労働によって自活するように導く方策を提案したものであり、そこにジェントリー層と同じ対策が、直ぐにとりうる余地はないからである。物乞いをしている層をどのようにみているのかという、人間観が問われる必要がある。先の「完全に無能でも完全に意欲を欠くわけではない」という記述をみれば、ロックが物乞いであっても、結局環境によってそうになっているだけで、本来的には、労働を行うことができるという確信をもっていることがわかる。労働はロックにおいては、人間の本質であるから、基本的に貧民をも、人間として同等にみているのであって、就労学校は、そこに至る道のひとつと考えられていると解釈すれば、決してロックは、本質的に二重構造で教育を考えていたわけでない。

ロックは貧民の方からの人間性の部分的獲得を論じたが、紳士の方から職人的人間を論じたのがルソーである。

ルソーは『人間不平等起源論』で、自然状態では、人間はすべてよき存在であったが、文明の発達とともに墮落し、不平等が生じ、それが抑圧的な状況にまでなっていることを批判した。当然「自然状態」は実際には存在しない「理念形」であったが、それをどのように実現するかを、ルソーは人間形成のレベルで『エミール』を、政治体制のレベルで『社会契約論』を書くことで示した。前者は教育改革、後者は市民革命を引き起こす動因となった。

ルソーの生きていた時代は身分制社会であり、貴族が支配層であり、労働をして生きているのは第三身分であった。そして、貴族は第三身分を軽

蔑していたし、同じ「人間」であるとも考えていなかっただろう。ルソーはそうした人間観を根本的に覆し、貴族層に対して、第三身分の生き方こそが真の人間的生き方だと説き、そして、そのための教育を具体的に示したのである。

ルソーによれば、「あらゆる幸福のうちで第一の幸福とは、権力ではなくして自由」であり⁹⁴⁾、「運命の打撃にもめげず、やはり人間としてとどまっていられる者こそしあわせな人」である⁹⁵⁾。それは自分の働きによって生活を支えている人であり、国家の年金で生活している人ではない。

人間に生活の資を供給することのできるすべての仕事のなかで、人間をもっとも自然状態に近づけるのは、手を使う労働である。あらゆる身分のなかで、運命と人間とからもっとも独立しているのは、職人の身分である⁹⁶⁾。

そのためにルソーは、貴族の子弟であるエミールに職人としての技術を教えようとする。すると、母親が猛然と抗議をする。

母 「わたしの息子に職業をですって！わたしの息子を職人にですって！先生、それは本気なのですか。」

ルソー 「奥さん、わたしはあなたよりよほど本気にそのことを考えているのです。あなたはご子息を貴族とか、公爵とか、大公とか、そんなものにしかねないようにしようとしていらっしゃる。そして、たぶんいつかは、ご子息はあらずもがなの人間にしかねないようにしていらっしゃる。ところが、わたしは、失うことがありえないような地位を、どんな時代にも恥ずかしくないような地位を彼に与えたいと思っていますのです。わたしは彼を人間の状態に引き上げたいと思っていますのです。」⁹⁷⁾

人間の悟性の中にはいつてくるものは、感覚を通してはいつてくるのだから、最初の哲学の先生は、われわれの足、手、眼だという感覚論の立場をとるルソーは⁹⁸⁾、人がしていることは誰でもできるのであって、それができないのは、訓練の方法を見いだしていないからだと考える⁹⁹⁾。従って、適切な教育方法さえ見いだし、それを実践すれば、貴族も農民も職人も、できることの相違はない。有名なルソーの理想の人生、「農夫のように

働き、哲学者のように考える」¹⁰⁰⁾という言葉は、後の全面発達論（精神労働と肉体労働の分離の廃止）に大きな影響を与えたものであるが、ルソーにとっては、身体の訓練と精神の訓練とが、互いに疲労を癒すものであると位置づけられている。

ロックは貧しい者でも環境が整えば、同じ労働で生きていく人間になれると考え、ルソーは貴族も人間として生きる為には、職人技を身につけて、労働で生きる人間になる必要があると説いたのである。方向性は反対だが、到達点は同じであった。

3-3. ジェームズ・ミルとロバート・オーウェン

イギリスで産業革命が起り、労働者が階級として出現したとき、教育理論も新たな段階に入った。ロックやルソーはおよそ教育に係わる人物ではなかったし、また、大衆を対象とした教育が目立って出現していたわけでもない。また、大衆教育に対する社会的要請も多くはなかった。それに対してオーウェンは、潜在的にある教育への社会的要請を実践に基いた結果によって示したのである。オーウェンは1771年に生まれ、歴史に残る活躍をしたのは、1810年から20年弱であり、活躍時期は1773年生まれのジェームズ・ミルとかなり重なっているのも興味深い。

オーウェンは人生の前半期は成功した経営者であり、国会議員として工場法制定に努力した政治家でもあった。そして経営者として工場内に学校を設立し、そこで労働者となる前に学校で学ぶ期間を設けるシステムを実施して、それが経営者としての成功の原因ともなった。教育理論としては、かなりずしも独創的なわけではないが、現実に行って成果をあげた点で、大きな意味もっている。

適当な手段で、どんな性格も、最善のものから最悪のものも、無知も知識のあるものまで付与することができ、それは実際に影響力のある人が行っている¹⁰¹⁾。そして、これは、戦争や流血なしに実現できることであり、これまでその方法を人類は知らなかったが、無知が取り去られれば、最大量の幸福を個人と人類に与えるような性格を、どのように形成すべきかがわかると、オー

ウェンは主張する¹⁰²⁾。しかし、現実の労働階級の子どもたちは、「年端のいかない子どもたちが、食事の時間を除いて、朝6時から夕方7時まで、工場内でたちどおしで働き続け」でおり、そういう状態で、そのあと教育を受けて上達しようなどと考えない。だから、そういう子どもたちは、徒弟期間を満了すると、エジンバラやグラスゴウにでかけて、大都会がかもしだす無数の誘惑に襲われて、その犠牲となると説く¹⁰³⁾。従って、12歳になり、教育が完成し、身体が仕事に堪えられるようになるまで、仕事をさせないのがよいとするのである¹⁰⁴⁾。

当然オーウェンは、現実の大衆の学校の現実を批判する。

多くの学校では、貧困労働階級の子どもたちは、彼らの読んだことを理解するようには決して教えられていないのであって、従ってみせかけの授業に費やされる時間は空費されているのである。他の学校では、子どもたちは教師の無知から、わけもわからずに信ずるように教えられ、かくて思考し正確に推論することは決して教えられないのである。これらの真に悲しむべき習慣は、若い精神を平明単純で合理的な教育に不適にせずにはおかない¹⁰⁵⁾。

当時のイギリスはやがてモニトリアル・システムと呼ばれる学校が知られるようになるが、大衆用の学校もかなり運営されており、しかし、そこでは効果的な教授活動が行われているとはいえないものだった¹⁰⁶⁾。しかし、しっかりとした知識の教授と将来必要な事実を知っておけば、政府が救貧対策として労働を与えるようなことをしなくても、学んだ青年自身が自活するに足る仕事を見いだすことができるとする¹⁰⁷⁾。オーウェンの構想は、ロックが貧民学校の先に見ていたものを、現実化したと見ることができる。

ジェイムズ・ミルは、これまでジョン・スチュアート・ミルの父親として、息子に天才教育を施した人物として有名であったが、近年息子よりも優れた人物という評価もあり、特に教育理論の面では、ジョンにはほとんど論文がないのに対して、ジェイムズは教育論を書いている。ジェイム

ズは、スコットランドに生まれ、小学校から大学まで学び、その後ロンドンに出て活躍するようになってから、レベルの高い教育機関、ユニバーシティ・カレッジの創設と運営に携わったし、また、労働者の教育組織にも協力をしていた。更に、息子ジョンに対する徹底した早期教育は、『ミル自伝』によってかなり詳しく報告されており、ジェイムズ（以下単にミル）の最も高いレベルでの教育観を知ることができる¹⁰⁸⁾。

ミルの最も基本的な教育の原則は以下の言葉に示されている。

最近までは知性が大多数の国民にとって望ましい資質であることは否定されてきた。人間はふたつの階級からならねばならぬ、即ち抑圧者の階級と被抑圧者の階級からならねばならぬ、と考える人の胸の内では、知性は力なのであるから、このことは避けたい意見である。現在労働階級のため教育に対しに大きな関心が払われているかをみれば、知識や、知識に常に付随してくる本ものの道徳において、いかに大きな進歩がなされてきたかがわかるであろうというものである¹⁰⁹⁾。

富めるものも貧しいものも、同じような正義、同じような廉潔さに向かって努力せねばならないように、妨害要因がないならば、同じような知性に向かっても努力せねばならない¹¹⁰⁾。教育の抽象的目的としては、ロックやルソーと大きな変わりはない。

教育の目的は、個人をば、まず第一に自分自身の幸福にとり、第二に他の人びとの幸福にとり、できうる限り有用な手段とならしめることにある。この目的の手段となるのに適した資質は、一つには身体の資質であり、また一つには精神の資質である。

ここで用いる意味の教育は、人間の精神を最大限幸福の原因たらしめるため——人間が——利用しうるすべての手段を最も善く利用することである¹¹¹⁾。

異なるのは、ロックやコメニウスなどと異なって¹¹²⁾、全てが学びうることを、初等教育のレベルではなく、当初から高等教育に連なるレベルで考えていることである¹¹³⁾。幸福を左右する精神

の性質に影響を与えるものは、すべて研究の範囲であり、従って、人間性に関する学問全体が教育に関する学問の一部門である。その柱は、事象それ自体についての知識（歴史）と、それらの継起の順序についての知識（哲学）である¹¹⁴⁾。そして、こうした知識や認識の構造を詳細に検討したうえで、ミルは、教育の作業により創出をめざすべき精神の資質として、知性、自制心、忍耐、正義、思いやりをあげる¹¹⁵⁾。そして、ここでは省略するが、家庭教育、技術教育（学校教育）、社会教育、政治教育の領域での教育のあり方を論じているのである。

ミルが考えていた教育のイメージを具体的に知るには、やはり、息子に対して行った実践をみておくことが必要だろう。その教育の特質は、古典の書物を中心に、徹底した議論をしながら、理解を深めていることである。幼児にこのような難解な本を読ませるだけではなく、父親の方からも様々な問いかけをしているのは、驚きだが、更に、ジョンは、ほとんど父親が仕事をしているそばで読書をしており、父がどんなに忙しいときでも、息子の質問などに関しては、仕事を妨げられているにもかかわらず、嫌がることなく、真摯に応じていたこと、そして、散歩なども利用しながら、議論をしていたことである。当時多くの知識人と交友していたジェイムズだから可能だったろうが、早い時期からそうした知識人たちと接する機会を儲けて、議論に加わらせていた¹¹⁶⁾。ミルの想定した教育は、高度な知的内容であるが、それは決して伝統的な古典教育ではなく、息子への教育スタイルを考えれば、プラトンの対話的なものであった。それを労働者にも可能であると考えて、実践活動を行ったのである。

3-4. デューイ

デューイは、義務教育制度が成立し、これまで学校などに行かなかった子どもたちが大量に学校に押し寄せた状況を打開するために、これまでの教育方法や内容を変革するの必要を感じたのである。経験主義教育への批判によって、影響が低下したと考えられているが、21世紀スキルの議論の中で、その重要性が再認識されているように思わ

れる。21世紀スキルは、その基本的な考えがデューイの思想に依拠しているように考えられるからである。しかし、重要な点での相違もある。まずは、デューイの基本的な教育論を整理しておこう。

デューイの教育論としての主著が『民主主義と教育』という題名であることからわかるように、教育を社会的な側面から考察するところから出発し、民主主義社会にとって、正しい教育のあり方が不可欠であると考えた。そして、プラトン以来の主要な発想を批判している。

プラトンは、社会における個人の地位は、家柄とか財産とかなんらかの因襲の身分とかによって決定されるべきではなくて、教育の過程で発見されたその人の天性によって決められるべきである、と強く主張したけれども、彼は個人の独自性を全く認めなかった。彼にとっては、諸個人は生まれつき階級に、しかも非常に少数の階級に分類されるものなのである。したがって、試験をし、ふるい分けをする教育の機能は、ただ、三つの階級の中のどれに個人が属するかを明らかにするにすぎないのである¹¹⁷⁾。

プラトンにおいては、正しい教育は理想国が現れるまで現れることはできず、その後の教育は、理想国の維持のためだけに向けられる。理想国の実現のためには、哲学的英知とその支配権の掌握という偶然の一致をあてにするしかなかったと批判している¹¹⁸⁾。

啓蒙主義的個人主義の教育理論については、社会の偏見や制約から個人を解放し、個人の多様性と自由を求めること、そして、自然と合致する教育が教授と訓育の目標と方法を教えるとするのだが、自然に頼ることでわかるように、理想の実現を保障する機関を全く欠いていると、啓蒙主義も批判する¹¹⁹⁾。結局国民の教育を制度化するのは民族的な国家であり、国家が人類に、世界主義が国家主義に変わる。その結果、個人主義の理論は勢力を失い民族主義が重視され、政治的権力への服従や目上のものへの命令への献身が要求される。そこで国家的目標とより広い社会的目標との衝突が起こり、それが民主的社会における教育の根本問題であると、デューイは考える¹²⁰⁾。彼の対応策は以下の通りである。

学校施設を十分に拡充し、その能率を十分に高めて、経済的不平等の効果を、名目だけでなく実際に、減殺し、国家の被後見人すべてに対して将来の生活に必要な知識や技能を平等に習得することを、保障するようにしなければならない¹²¹⁾。

ではどのような教育が必要なのか。デューイの教育の本質は、学校の中に生産的な活動があるという点に集約される¹²²⁾。人類が発生して以来、広い意味での教育はずっと存在したが、国家が発生し、教育の種類が様々に分化したあとでも、基本的には「職業教育」であった。ほとんどの人は労働の中で学び、学校が発生してからも、学校で学ぶ人たちはそれが彼らの職業に必要な知識・技能を学ぶ場であったのである¹²³⁾。

しかし、先進国で19世紀末から始まる国家的な義務教育制度において、国民が共通に学ぶことになったことによって、職業の多様性と学校教育の内容に大きな齟齬が生じることになる。学校制度が複線型で、階層的に形成され、基本的には中産階級の文化が教育内容の柱となっていく。更に、実際にはほとんど生活の中でどの階層にとっても不可欠ではない古典的教養が重視されることで、科学の分野からの挑戦、学校闘争がヨーロッパ各地で行われる¹²⁴⁾。また労働者階級の子どもたちからの学校忌避は、程度の差はあれ、多くの国で起きた¹²⁵⁾。

子どもはもちろん職業をもっていないが、子どもにとってそれは「生活」であるとする。学校が自然な社会単位として自ら組織できない理由は、生産的な活動という要素が欠けているからであり、学校が抽象的な、迂遠な学科を学ぶ場所ではなく、生活と結びつき、そこで子どもが生活を指導されることによって学ぶ、小型の社会、萌芽的な社会になることで可能になるとデューイは考える¹²⁶⁾。それは知識を授けるための「実物教授」は農場や庭園で実際に植物や動物とともに生活し、その世話をすることで得られるものには代わり得ない¹²⁷⁾。だから、「観察・創意工夫・構成的想像・論理的志向・そしてまた実地実物に直接に接触することによって得られる現実感などが不断に訓練」されることが必要なのである¹²⁸⁾。

出発は「経験」である。そして、「経験」とは能動的には「試みること」であり、受動的には「被ること」である。

経験とはもともと能動＝受動的な事柄であって、それはもともとは認識的な事柄ではないのである。しかし、経験の価値の尺度はそれが示すようになる関係ないし連続性の認識にある。経験は、それが累積的であれば、すなわち何かに達するならば、つまり意味をもてば、それだけ、認識を含むのである¹²⁹⁾。

ところが、こうした活動は解決しなければならない問題にぶつかる。そして困難を克服するには反省が必要であり、そこから思考の必要が生じる¹³⁰⁾。あるいは別の観点、新しい光りをあてることでもある¹³¹⁾。

さて、「経験」というとき、子どもにとっての経験は、教育的にみても狭すぎる活動ではないかという疑問は絶えずだされてきた。特に、日本の戦後教育改革で、経験主義カリキュラムが導入されたとき、多くが「ごっこ遊び」に終始するような取り組みに陥り、学力低下を引き起こしたと批判されたことから、そうした印象をもたれている。しかし、デューイは決して、科学的成果を教授することや、教養を否定しているわけではない。デューイが批判するのは次のような点である。

第一に、子どもが感じていることと組織的なつながりが欠けていること。あまりに高すぎる形式的なシンボルに価値をおくことである。第二に動機が欠けていること、そして第三に、科学的事柄が既成のものであり、子どもが獲得するような性質を欠けていることである¹³²⁾。このような欠陥を自覚し、子どもの学ぶ衝動を活用すること、次の要素を満たすことで、科学的成果を学ぶことができるとする。

- ・社会的本能 コミュニケーション・交際
- ・発見する興味
- ・制作の本能 構成的衝動
- ・表現的衝動¹³³⁾

さて、経験を21世紀の社会で考えねばならないのは、直接的体験は減少し、間接的、バーチャルな経験が増大していくことである。離れている人

と対話したり、時間がずれてもアーカイブで補うことができるようになる。更に現実には全く存在しないバーチャルな要素の体験もある。もちろん、デューイはこうしたバーチャルな体験をしているわけではないが、しかし、幼児から接する場合、バーチャルな世界の体験も、当然デューイ的な意味での経験と意識されるようになるだろう¹³⁴⁾。

4. 教養論の検討

教養論の検討が必要である理由は、21世紀スキルはまさしく21世紀の教養論として提起されているからである。もちろん、教養には多様な意味があり、時代と地域、言語によって意味が微妙に異なっているが、ここでは、主に学校教育で形成される最も高い水準の獲得内容と考えておく。厳密に言えば、教養は必ずしも学校教育で教えられるものではない。例えば現在のカルチャーセンターは、日本語に訳せば「教養施設」だが、そこは学校とは異なっている。しかし、カルチャーセンターで学ぶ内容は、ほとんどが学校で教えられる内容であり、古来ギリシャ時代から、身につけるべき知的、身体的能力は、プラトンのアカデメイアで明らかのように、学校で教えられていたし、また、中世のリベラル・アーツも中世の大学で学ぶべき基礎的教育内容だった。そして、後の章で検討するが、21世紀スキルも、従来教養として考えられてきた内容を21世紀にふさわしいと考えられるように再構築しようとしたものであるし、教え、学ぶ場所は学校が想定されている。

4-1. アーノルド

19世紀半ば、ジェイムズ・ミルやロバート・オーウェンが活躍した時期のあと、イギリス社会は大きな変貌をとげる。オーウェンの主張はなかなか受け入れられなかったが、時代が進むにつれて、労働者を無視することは困難になり、民主主義が避けられない政治体制として、支配層にも次第に理解されるようになる。そのなかで、デューイが指摘した国家主義と自然教育の矛盾が具体的な制度構想をめぐって争われるようになった。国家による学校制度を作り上げようとする勢力と自

由（自己費用による）な教育との対立である。更に、より根本的な対立として、労働者の立場からの教育制度の要求（オーウェンやマルクス）があった。自由主義者は、各自の要求と責任で内容を決める主張だから、共通の教育内容（教養）を構想することには消極的であり、また、労働者からの教育要求は、3Rを越える部分は、むしろ職業教育に向かっていた。このなかで、国家による教育を主張する人たちが、教養論を前面に押し出すことになった。アーノルドがその代表である。

アーノルド（1822-1888）は、主に視学官の地位にあり、ドイツ、フランス、アメリカの教育の実情を視察する役割を担ったが、教育行政官として、国家による教育の必要性を説きつつ、それを教養論で補完したのである。

アーノルドの教養論の基礎にあるのは、彼の民主主義に対する立場である。1688年の革命以来、イギリスの貴族は、国の共通文化（共通教養 common culture）を十分理解した上で、統治してきた。しかし、イギリス社会の変化は、貴族の統治が不可能な時代になっている。国家はともすると独裁政治に陥りがちであるから、それに対抗するためには、民主主義を発展させなければならない¹³⁵⁾。そして、フランス革命を高く評価するのだが、あまりに国家的支配が強すぎることを危惧する。他方、イギリスではそうした危惧は存在しないが、自己統制的民主主義の能力が未発達であることを危惧するのである¹³⁶⁾。また民主主義の要素である「平等」について、社会的平等を達成したフランスのように、モラルが欠けてしまうことを危惧する¹³⁷⁾。アーノルドにとって、民主主義を実質化するのが、教養であり、平等を支える精神が宗教なのである。この立場から、民主主義と平等に危機をもたらすものが、貴族の教養的な墮落であり、平等を脅かすのが、宗教的自由を主張するリベラリズムであり、それらは、「無秩序」の原因となっていると主張する。

ではアーノルドにとって教養とはどのようなものか。彼の最も有名な著作である『教養と無秩序』で、目的を「教養を、英国の現在の窮境を大いに救うものとして、推奨することにある」とした上で、次のように述べる。

教養とは、われわれの総体的な完全を追求することであり、それにはまず、われわれに最もかわりの深いすべての問題について、世界でこれまでに考えられ語られた最善のものを知り、さらにこの知識を通じて、われわれのおさまりの思想と習慣とに、新鮮な自由な思想の流れをそそぎかけるようにする¹³⁸⁾。

また、決して教養を過去の固定的な知識と捉えていたわけではない。

教養の任務あるいは目的とは、ある対抗的な迷信に勝利を与えることではなく、ただ単に、問題となっていることから全体に自由な、新鮮な思想に流れをそそぎかけることであることを納得させるか否かにかかっている。(略) 真の人間の完全とは、人間性のあらゆる面を発達させる、円満な完全であり、社会のあらゆる部分を発展させる、一般的完全であると考えさせる¹³⁹⁾。

つまり、アーノルドにとって、教養とは、古典に関する知識をひけらかしたり、虚栄心を満たしたりするものではなく、さらに教養をもっているかどうかで、人を差別する道具でもない。教養とは知的好奇心から獲得するものなのである¹⁴⁰⁾。

社会の構成を、アーノルドは「野蛮人・俗物・大衆」と分類したが、いずれも教養が欠如しているのである。野蛮人とは貴族層のことであり、俗物とはブルジョア層（中間階級）のことであり。本来十分な教養をもっているべきこのふたつの階層が、教養をもたないために、社会の有効な統治が行われなくなっていることを、最も失望しているのである。大衆は放置されれば、当然教養をもちようがないが、リベラリストたちは、大衆のために国家的な教育機関を設置して、教養をもたせることを否定するとして、リベラリストを批判しながら、国家によって設立される学校を主張するのである¹⁴¹⁾。そのモデルとして、プロシヤの学校制度をあげる。

プロシヤにおいては、最上の学校はいわゆる帝室保護学校である。すなわち、帝王自身によって設立され、彼自身の歳費から維持金を受けている。そして帝王とかれを代表する人びとの直接の統制と管理のもとにおかれ、学校はかくあるべしという模範の役をつとめている学校で

ある¹⁴²⁾。

教養の要素として、アーノルドは宗教を絶対視している。『教養と無秩序』では、アイルランドの教会問題で、自由党を激しく攻撃しているが、「教養の同情者の現在における真の任務は、この誤った観念を消滅させ、正しい道理と確実な明白な事理とに対する信仰をひろめ、人びとに利害にとらわれずに自由にかれらの思想と意識とをかれらのおさまりの概念や習慣の上に働かすようにさせること、人びとに不完全な知識をもって誠実に行動するよりも行動するためのより堅実な知識の基礎を獲得するようにさせることである」との認識にあったが¹⁴³⁾、フランスの民主主義を高く評価しながらも、賛同できなかったのは、フランスが世俗的性格を強く押し出していたからであろう。

アーノルドの教養論は、現在では社会の発展の方向とは異なる、宗教を重んじる復古的なものであり、民主主義の立場をとりながら、労働者の主張に共感できなかった復古的なものとの評価が多数だが¹⁴⁴⁾、貴族層の墮落や中間層の無力の中で、民主主義の実質を構築することを意図した点で高く評価する研究もある¹⁴⁵⁾。

ここでは、アーノルドが民主主義が実際に機能するために、人びとに教養が必要であることを説いたことについては、意味のあることだと評価しておきたい。

4-2. アメリカの大学とハッチンズ

アメリカの大学は、19世紀後半から改革が本格化し、20世紀にはいって高い評価を受けるようになった。19世紀前半までのアメリカの大学は、後期中等教育のような内容を、暗記主義の方法で教授する、古くさい教育機関であったが、ドイツの大学方式を取り入れた改革が始まり、研究を重視するように変化していった。そして、現在の多くの大学では、学部を教養大学として一般教育を行い、職業教育のための専門教育は大学院で行う体制をとっている。そうした大学では、一般的に、学部段階では理学部と文学部の構成で、主専攻と副専攻の二専攻を履修する形態が推奨されている。そうした幅広い教養を身につけた上で、高度

な専門性を必要とする職業教育は、大学院で行うが、どちらの学部にも属していても、受験可能になっている。それだけ一般教育を重視していることになる。しかし、一般教育（general education）とリベラル教育（liberal education）のふたつの志向性があり、議論されてきた。

ロスブラットは次のように書いている。

リベラル・エデュケーションは、主として社会的政治的指導性を発揮する地位を占有するエリート集団のためのものであり、それゆえ、俗物紳士的な要素もっていた。どの西欧社会においても、リベラル・エデュケーションの古典的目的は、ほとんど常に、私生活ではなく、公的な生活への準備であると考えられてきたと、いってよいが、そのカリキュラムはただひとつというわけではない。

リベラル・エデュケーションの目的としては、公的生活への準備のほうが特定の職業にむけての訓練よりも重視されたために、専門教育は軽視された¹⁴⁶⁾。

リベラル・エデュケーションは、当時のエリートの象徴的知識であり、実際に使う知識ではなかったから、古典を過去の文化として学ぶものであり、産業革命が進展するに従って、中心的な教養としては必然的に減じゆくものだった¹⁴⁷⁾。

リベラル・エデュケーションの理念が下火になると、20世紀初等から、一般教育の理念が主張されるようになってきた。一般教育は、リベラル・アーツの理念を引き継ぐリベラル・エデュケーションとは異なって、職業教育に対峙する原則として主張された。つまり、職業教育は必然的に狭い専門領域に限定されるので、それ以前に広い教養を身につける必要があるという意識である。その主要な主張者が、若くしてシカゴ大学の総長になり、Great Booksの刊行者となったハッチンズである。

ハッチンズは当時のアメリカの大学の問題を、お金を求めている傾向が強くと、知的形成が混乱していることと認識している¹⁴⁸⁾。総長として長く務めたから、大学の財政問題や学生たちが将来の経済力を求める意識については、熟知していたが、ここでは、その面での解決にも、大学全体の

知的レベルをあげることが不可欠であると認識していたことを確認しておくに留める。

ハッチンズの一般教育の主張は、まず早期に職業教育を始めることへの危惧が背景としてある。

リベラル・アーツが、一部高校、一部大学で行われ、大学で行われている部分も、一部は「一般教育」で、一部は「専門教育」で行われているが¹⁴⁹⁾、大学の1、2年で職業教育をするのは愚かである¹⁵⁰⁾。もちろん、これは、1、2年は一般教育に徹すべきであるとの主張になる¹⁵¹⁾。では、何故一般教育が必要なのか。

教育の目的として、「共通の人間性の要素を引き出すことであり、それは時代と場所を越えて妥当する¹⁵²⁾。「人と人を、現在と過去を結びつけ、そして、民族の思考を前進させることである¹⁵³⁾。

4-3. 日本における教養主義の没落

日本では、教養に関してかなり明確な時代的刻印があった。最初に教養という言葉で普及したのは、「大正教養主義」である。第一次世界大戦後の一時期、阿部次郎、倉田百三、西田幾多郎などの著作が、多くの若者に読まれ、文学的著作を中心として、人生を考える志向を指している。大正教養主義は、その後戦時体制の進行とともに廃れ、昭和教養主義に置き換えられていく。

また第二次大戦後、新制大学が成立したときに、最初の二学年は、教養科目を主に学ぶ時期として、取るべき教養科目の単位数などが決められていたが、1991年大学審議会答申による、大学カリキュラムの弾力化によって、教養科目がほとんどの大学で圧縮され、大学で学ぶ大部分は専門科目となったことによる、「教養の衰退」についても検討する必要がある。

竹内洋『教養主義の没落』、斎藤兆史『教養の力 東大駒場で学ぶこと』、村上陽一郎『あらためて教養とは』などが、日本の大正教養主義から戦後の「教養」の衰退について書いている。

三人の共通点は、大正教養主義を、文学的な内容を中核としている点である。実際の当時意識されていた教養主義は、確かにそういうものだったのだろう。しかし、当時既に三木清などの教養主義批判があった。『私の読書遍歴』で三木は、教

養から政治的教養を省いていたことが、教養の弱さであると批判していた¹⁵⁴⁾。戦前は民主主義ではないから、政治的教養は不要と考えたわけではなく、政治を逃げるのが、「大正教養主義」であったとすれば、三木の批判を無視することは、できない。

第二の弱点と考えられるのは、自然科学的内容が無視されていることである。教養を論じる場合に必ず出てくる、リベラル・アーツやギリシャにおける市民に必要な資質には、必ず「理系」の内容がはいっている。自由七科ともいわれるそれは、文法・論理学・修辞学と算術・幾何学・天文学・音楽であった。音楽も芸術というより、物理学的な色彩の強いものだったから、半分は現在の自然科学に近いものが、古来「教養」を形成してきたのである。しかし、大正教養主義では、まるで自然科学が無視されており、その担い手の多くがそうだったとしても、実際には、自然科学的教養を重視する考え方もあった点を無視している¹⁵⁵⁾。

戦後の大学における一般教養科目の枠は、自由化される以前は、語学は別として、自然科学、人文科学、社会科学からそれぞれ取得するようになっていた。ちなみに私の学生時代はそれぞれ12単位ずつで、合計36単位が最低限必要であった。文科系の学部であっても、自然科学を12単位（当時は4単位ものが普通だったので）、3科目を取らなければならなかったのである。このような枠組みが戦後できたことは、戦前においても教養の内容に、自然科学的領域が意識されていたと考えるのが自然で、そういう意味で、大正教養主義は、教養論としても歪んだものであったと見るべきではないだろうか。

ここでは、何故「教養主義」が消滅したのかに関して、竹内が指摘していることは確認しておこう。竹内は、「教養主義」が最も栄えたのは実は第二次大戦後であり、中心には丸山真男などがいた。しかし、1960年代の大学紛争に象徴される大学の変容、それはエリートではなく新中間層とも呼ぶべき大衆化された大学の学生たちであり、中間文化が隆盛し、「教養」は逆に足枷となるような時代の変化があったからだとする¹⁵⁶⁾。

6. 小結論

教養論としても、スノーのふたつの文化論やランジュバン・ワロンの国民的教養論などの検討が残っている。日本では受験体制のために、多くの高校生は、高校の早い時期に自然科学を学ぶことをやめてしまう。大学に入学しても、学ぶ必要のない大学が多いから、スノーの提起した問題は、ますます大きな課題として残されているが、しかし、それが問題であると認識されることすら少なくなった。

ランジュバンやワロンは、「職業は人を分け、教養は結びつける」と主張したし、ハッチンズもそのように考えた。しかし、ネットワーク社会での労働形態は、人の結びつき方を大きく変えてしまう。face-to-faceだけではなく、ネットワークを介しての結びつきも大きな意味をもってくる。したがって、職業こそ人を結びつける側面もあるし、教養そのものが次第に分化してくる傾向があり、必ずしも「一般教養」ではなくなりつつある。また国民的教養論も多文化論に転換していかねばならないだろう。そういう意味では、国家的な教育内容の標準を制定することに、意味があるとはいえないだろう。現在の教育標準が、国際的な学力テストへの対応として提起されている側面が強いからである。国家間の学力競争は、グローバル社会の中ではあまり意味がなくなるはずである。そのとき、学校はどうなるのだろうか。あるいは教師はどうなるのだろうか。

ケインズが問いかけたのは、経済等の外的制約がなくなったとき、人間は何を望むのかということと読み替えることができる。ハクスリーは単純作業と快楽を求めると想定した。裕福なアメリカ人は更に裕福になることを望んでいる。また、膨大な情報がインターネットに蓄積され、自由に情報が取り出されるが、それはまた個人の情報が管理・監視されることにもなるとき、人間は、それを受け入れ、情報を利用できることを望むのか、あるいは、監視に恐怖を抱きながら生きるのか。前者の問いは、人々の選択が可能としても、後者の問いは、人々の思惑を超えて進行しているとも

いえる。トフラーやケリーは、社会的変化が必然であることを前提として新しい社会を描いたが、すると人間は未来を創造することはできないのだろうか。

教育の未来を考えると、人工知能が職業構造を大きく変えることを前提にすれば、確実に人間は生涯学び続ける必要が出てくるから、学校で将来の準備をして、社会に出れば、その仕事を生涯行うことはほとんどなくなり、新しい知識を学びつつ、新しい仕事に適応していくことが求められる。とするならば、現在の準備としての学校は確実に残るだろうが、縮小し、生涯に渡る学ぶ組織が、モジュラー的に構成されると考えるのが自然だろう。既に、現在でも子どもたちは学校だけではなく、塾で勉強し、地域のさまざまなクラブやセンターでスポーツや芸術を学んでいる。現在学校で教えていることが、部分的に解体して、生涯学習体系のなかに含まれるようになるし、また、障害をもった人たちが学ぶ場も、多様になるだろう。

そうしたモジュラー的な学びかたをするようになったとき、また新たな問題が生じるように思われる。社会はある目的を実現するための機能的な社会だけではなく、そこに存在することで人間的な満足を得る場として存在する社会もある。特に日本社会は、同心円構造をまだまだ保持しており、特に学校に通っている年代では、生活のほとんどが同心円、あるいは同一円で行われている。だから、学校が人間的、精神的な安定のよりどころになっている。モジュラー社会になることを恐れる気持ちが、特に日本人には強いと思われるが、そうした人間的なつながりをもとめる精神が、モジュラー社会になったときに、十分に機能するのかという問題である。これは、外的制約がなくなったとき、人間は自分を向上させる活動に時間と情熱を注ぐものだという、ケインズの提起した課題と、重なっていることでもある。教育が、価値的な行為であるとすれば、教育実践は、そうした向上を目指す人間を育て、また、モジュラー社会においても、あるいはバーチャルな人間関係でも、精神的に安定できる資質を形成することが求められるといえる。

<注記>

- 1) Tony Dolphin “Technology, Globalisation and the Future of Work in Europe” 2015 Institute for Public Policy Research 「オックスフォード大学が認定 あと10年で「消える職業」「なくなる仕事」702業種を徹底調査してわかった」『週刊現代』2014118 2016年8月に厚生労働省は、『働き方の未来2035～一人ひとりが輝くために』という報告書を出し、そこで、単に少なからぬ職業が消滅するだけではなく、正規雇用と非正規雇用の差がなくなり、プロジェクト毎に雇用されて、プロジェクトが終われば、次のプロジェクトに移っていく、そこには、同一の企業に雇用されているという前提もなくなり、柔軟な雇用形態になるという予測までだしている。極めて高度な知的なスキルをもった労働者であれば、このような雇用形態がプラスに働く可能性があるが、一般的には、安定した雇用形態が崩れて、社会保障の基盤も曖昧になり、不安定な要素が拡大することは容易に想像できる。また、このような形態であれば、日本的経営の特質である企業内教育は、ほとんど姿を消すと考えられるから、キャリアアップのための教育は、社会教育としての職業教育機関、あるいは大学や大学院が担うようになるだろう。生涯学習の形態も大きな変化が起きる。報告によれば、このような方向性は既に部分的に生じており、副業を容認する企業が増えているのはその一端であるとしている。
- 2) <http://www.corestandards.org/standards-in-your-state/>
- 3) “Veröffentlichungen der Kultusministerkonferenz Bildungsstandards der Kultusministerkonferenz” 2004. 12.16 p8-9 なおPISAをきっかけとして国家的な教育標準を制定することについては、かえって必要な領域をカバーせず、学習対象を狭めてしまうという批判もある。Raphael Thöne “Verwirklichung der Ideen Pestalozzis im Zeitalter von Pisa?”

- 4) しかし、2012年の問題では、計算させる旧来型の問題もだしている。
- 5) 翻訳されたものとしては、『個別化していく教育』『デマンドに応える学校』などがある。明石書店
- 6) その報告が『21世紀型スキルと諸外国の教育実践』田中義隆編 明石書店。
- 7) what we know about collaboration p21 partnership for 21st century learning
- 8) Ibid p1
- 9) P21” Framework Definitions P21 partnership for 21st century learning” p21
- 10) 通産省『世界のなかの日本を考える－21世紀に向けての役割と貢献』1986
- 11) 中央教育審議会の「21世紀を展望した我が国の教育の在り方について」1996
- 12) 日本の教育改革をともに考える会『21世紀への教育改革をともに考える』p131-135
- 13) 1991年に刊行された『21世紀への日本・全予兆』（学習研究社）と題する21世紀予想の書物があり、147のテーマが設定されているが、教育に関するテーマは、「大衆化する『社会と生活』』というテーマ群のなかで、中村秀一郎執筆の「現状では『私大倒産時代』がくる」と題する文章のみである。題名のように、少子化によって学生が少なくなり、私大が倒産するようになるという内容が予想されている。それは実際に起きている事態であるが、他のテーマはまったく取り扱われていないのは、やはり教育が伝統指向の活動だからだろうか。
- 14) P21 partnaership for 21st century learning” P21Framework Definitions” p21
- 15) Ons onderwijs 2032 Eindadvies
- 16) 原田翔太・浜田和幸『未来予見』ERNEST BOOKS 201671
- 17) カレル・チャペック『ロボット』はその代表的な例だろう。
- 18) 通産省『世界のなかの日本を考える－21世紀に向けての役割と貢献』1986, 61
- 19) 同, p105
- 20) 同, p124
- 21) 同, p132
- 22) 同, p137
- 23) 同, p182
- 24) 同, p250
- 25) 同, p253
- 26) モアは、この点で、ザイードの提起する「知識人」の典型であるといえる。ザイードはつぎのように書いている。「わたしの知識人論のなかで、ひとつの主題として重要な役割を演じているのが、普遍的で単一の基準にどこまでも固執する知識人の姿勢である。・・普遍性の意識とは、リスクを背負うことを意味する。・・もし敵による不当な侵略行為を非難するならば、自国の政府が弱小国家を侵略した場合にも、ひるまず非難の声をあげられるようになっていなければならないということだ。」E. W. ザイード『知識人とは何か』大橋洋一訳 平凡社, p15-17 モアは、カトリック信仰という単一の基準を守り、たとえ処刑される危険があったとしても、王への批判を貫いたわけである。
- 27) ジョナサン・スウィフト『ガリバー旅行記』も同様な様式といえる。
- 28) トマス・モア「ユートピア」『世界の名著 エラスムス トマス・モア』中央公論社, p407
- 29) 同, p360
- 30) 同, p363
- 31) 同, p367
- 32) 同, p434
- 33) 同, p408-410
- 34) 同, p394
- 35) 同, p370
- 36) 同, p410
- 37) 同, p476
- 38) 同, p370
- 39) 同, p447
- 40) 同, p448
- 41) 同, p474
- 42) John Maynard Keynes 'Economic Possibilities for our Grandchildren' 1930 in "Revising Keynes" edited by Lorenzo Pecchi, Gustavo

- Piga 2010
- 43) Fabrizio Zilibotti 'Economic Possibilities for our Grandchildren 75 Years After A Global Perspective' in "Revising Keynes" p32-33
- 44) Josef E. Stiglitz 'Toward a General Theory of Consumerism: Reflections on Keynes's Economic Possibilities for our Grandchildren' Why Do We Work More Than Keynes Expected? p42-44
- 45) Benjamin M. Friedman 'Economic Well-being in a Historical Context' in "Revising Keynes" p131
- 46) Richard B. Freeman 'Why Do We Work More Than Keynes Expected?' Why Do We Work More Than Keynes Expected? P137-139
フリーマンは、より多く労働しようとする理由として、収入効果（収入が増えるにより大きな収入を欲する）、代理効果（労働が他の幸福の代理となる）、賃金効果（賃金格差があるために、より上の地位に行こうとする）、競争圧力などをあげている。そして、ケインズの最大の誤りは労働の価値を認めなかったことだと批判している。
- 47) ただし、オランダのワークシェアリング政策のように、広い社会的合意の下で、個々人の労働時間を短縮し、失業者を救済すること、そして短縮された労働時間を自由時間の余暇的活用の増大や教育、育児等に振り向けることを実施した例もあるので、まったくの空想とはいえない面もある。
- 48) Keynes ibid p25-26
- 49) まだナチスが政権をとっているわけではないので、批判として出てくるわけではないが、後にナチス批判としてだされたフロムの『自由からの逃走』と重なる問題意識があるといえる。
- 50) フリードマンは、経済がよくなれば、人間は幸福になるとケインズは考えたが、生活の改善で幸福になるとは限らないと主張したアダム・スミスが正しかったと、ケインズを批判しているが、ケインズは、経済がよくなれば、人間が幸福になるための本当の課題に出
- てくるのだと主張しているのである。
- Freedman ibid p126-127
- 51) ケインズは、1930年代の時点での科学技術の進展の速さを驚きの目で描いているのであるが、戦後は更に1960年代から70年代にかけての急激な科学技術革新と、更に21世紀になってからのコンピューターとインターネットの普及、そして、人工知能の第三の波による大きな変化を、現在は迎えている。（因みに、60年代から70年代にかけての技術革新は、多くが第二次大戦で発展した軍事技術を転用したものであるといわれており、ケインズは、戦争を経済発展のマイナスとして描いたが、「統計的」経済指標では、一時的に戦争が経済を活性化させるし、また、技術革新をもたらすものであることを否定できない現実がある。）
- 52) この計画は、その後ソクラテス計画と名称変更されて拡大された。
- 53) Hanan Yoran "Between Utopia and Dystopia" 2010
- 54) ともにカトリック信徒としての立場を守ったが、モアが命を失っても固持した固いカトリック信徒だったのに対して、エラスムスはカトリック教会の腐敗を批判する、むしろ内面的にはキリスト教本来の精神を重視した立場であった。しかし、それがルター派からも、カトリック教会からも非難されることになったが、モアと同様に、固い信念をもち、状況に流されなかったという点で、モアと同じくザイードのいう「知識人」であった。
- 55) 最初の版は1932年であるが、第二次大戦後の1946年の序文で、600年後の世界を描いたが、100年後にも起きうることだとの考えにいたったことを、ハクスリーは書いている。それは、原爆投下が大きな衝撃与えたからのようだ。オルダス・ハクスリー『すばらしい新世界』黒原敏行訳 光文社, p387
- 56) 同, p171
- 57) 同, p318
- 58) 同, p323
- 59) 同, p338

- 60) 同, p346
- 61) 1948年に書かれたので、36年後を予想したものであり、バック・トゥー・ザ・フューチャーⅡに近い。
- 62) ケヴィン・ケリー『インターネットの次に来るもの未来を決める12の法則』服部桂訳 NHK出版, 2016
- 63) H. G. ウェルズは『タイム・マシン』で更に遠い未来として、全てが便利に発達した社会になった結果、人間が多くの動物的機能を喪失した社会を描いている。
- 64) アルビン・トフラー『未来の衝撃』徳山二郎中央公論社 具体的例としてあげているのは、最も速かった交通機関のスピードである。
- | | |
|------------|---------------|
| BC6000 ラクダ | 8マイル (時速以下同じ) |
| BC1699 馬車 | 20 |
| 1825 蒸気機関車 | 13 |
| 1880 蒸気機関車 | 100 |
| 1930 飛行機 | 400 |
| 1950 飛行機 | 800 |
| 1960 ロケット | 4000 |
| 1970 宇宙飛行士 | 18000 |
- 65) 紙の結婚衣装やレンタル革命をあげているが、学校の校舎について次のように書いている。ロサンゼルス教育委員会では、教室の25%は、将来、必要に応じて移築できるような臨時建築にしようとした。今日、アメリカの主要な学校区では、いくつかの臨時的な教室が使われている。こういった傾向は、今後さらに強くなるだろう。実際、臨時教室と学校建築業との関係は、紙衣類と衣類産業との関係のようなものである。
- 臨時教室を使用する目的は、学校側が人口密度の急激な変化に対処できるようにするためである。だが、簡単に着て捨てられる衣類のように、臨時教室の出現は、人間と物との関係における持続機関が過去よりもっと短くなることを意味している。
- ・・・移動教室は、アメリカだけにある現象ではない。イギリスでは、建築家のセドリック・プライスという人が、彼の命名によれば、考えるベルトなるものをつくり出している。
- これは、ノース・スタフォードシアの2万人の大学生のためにつくられた移動大学である。彼によると、「この大学では、永久建築の教室より一時的な教室を重要視している。」という。「あちこちに移すことができ、かつ、あれこれと組みあわせることのできる教室を大いに利用している」のである。——たとえば、列車のなかに教室がつけられ、それを一辺4マイルいないの場所ならどこにでも動かすことができるのだ。」同, 78
- 66) ニューヨークのマンハッタンで4日働き、500マイル離れた住宅地に3日住むビジネスマンを例にあげている。同, p97
- 67) 同, p126-147, レンタル人間サービスは、日本では派遣会社などで実現している。
- 68) 同, p150
- 69) 同, p160
- 70) 同, p180-181
- 71) 同, p264
- 72) さすがにこれらのことは、20世紀に生じるとトフラーが予言しているにもかかわらず、21世紀の現時点で実現していない。クローン人間は技術的には可能であるが、研究が禁止されているし、受精卵の冷凍保存は可能になっているが、胎児の冷凍保存は実現しているという情報はない。またトフラーは、死体から脳を取り出し、脳を数時間生かすことができたという報告を紹介しているが、脳の移植等は実現していない。
- 73) 同, p296
- 74) 同, p330
- 75) 同, p331-332
- 76) トフラー『未来の衝撃』47-480
- 77) 同上, p482-484
- 78) 同上, p492-498
- 79) ケリー前掲書
- 80) その詳細はプラトンやギリシャの教育に関する書物には必ず紹介されているので、ここでは省略する。(『国家下』岩波文庫第七章参照)
- 81) 同, p104-105
- 82) 廣川洋一『プラトンの学園 アカデメイア』講談社学術文庫, p181

- 83) プラトンは一度だけ講義をしたが、失敗で評判も悪く、二度としなかったとされる。廣川前掲, p184
- 84) 『国家下』 p144
- 85) 入学試験の存在は不明であり、昼間勉強して夜仕事をする者もいたとされる。また女性の学生もいた。廣川前掲, p121-124
- 86) プラトン『国家下』第七章参照 廣川前掲, p139-140 科目は、知的内容だけではなく、身体的な教育・訓練が柱として重視されており、アカデメイアは体育館が併設されていた。
- 87) ジョン・ロック「救貧法論」『ロック政治論集』法政大学出版局, p39-43
- 88) 同, p37
- 89) 同, p43
- 90) 同, p45
- 91) 同, p46
- 92) 同, p48-49
- 93) 二重基準については、門亜樹子「J. ロックにおける貧民と統治」『経済論叢別冊 調査と研究』(京都大学) 第32号 2006.4に詳しい。
- 94) ルソー『エミール』河出書房『世界の大思想17』 p61
- 95) 同, p199
- 96) 同, p200
- 97) 同, p200
- 98) 同, p114
- 99) 同, p141
- 100) 同, p209
- 101) ロバート・オーウェン『新社会観』岩波文庫, p28
- 102) 同, p34
- 103) 同, p49
- 104) 同, p56
- 105) 同, p81
- 106) モニトリアル・システムについては、児美川佳代子「近代イギリス大衆学校における一斉教授の成立について」『東京大学教育学部紀要』32巻 1992年
- 107) オーウェン 同, p140
- 108) 他方、息子のジョンは、10代半ばまで、父親の徹底した個人教授によって、あらゆる知識と思考力をトレーニングされており、学校には通っていない。父親が、近所の子どもたちと接触して、レベルの低い交流をすることを嫌ったためと考えられている。あまりに強い父親の影響力のために、20歳前後に、精神の危機を迎えたと、ジョン自身が自伝に書いており、ジェイムズの早期教育を否定的に捉える評価もあるが、むしろ、それを乗り越える力もつけていたというべきである。ミルの自伝には、弟たちのことが触れられていないが、実際には、弟の教育は兄であるジョンが受け持っていたようで、それは、ランカスター方式をジェイムズが高く評価していたために、そのような方式をとったのだと考えられる。
- 109) ジェイムズ・ミル『教育論・政府論』岩波文庫, p94
- 110) 同, p96
- 111) 同, P15
- 112) 「教育に関する著作においてはこの二人(ロックとミルトン) さえ「紳士」の教育のことしか念頭になく、教育とは貧しい人たちにも与えられる祝福であるという考えはこの二人の心にさえつゆぞ現れなかった。」同, p96
- 113) コメニウスは、決して初等レベルの教育に限定して「万人の教育」を構想していたわけではなく、生涯教育を構想していたが、しかし、その現実化の可能性を具体的に考察するには時代的制約が大きかった。コメニウス『パンパイディア 生涯にわたる教育の改善』太田光一訳 東信堂 参照 ミルは次のように書いている。「これら大多数のものは等しく精神的にすぐれたものになりうるとみることができようし、人びとをして互いにあい異なる存在にならしめる原因をさがすこともできよう。こういえるなら、教育の力、道徳的・知的に粗野な低い段階と、ただに現在の完成度ばかりか今後とも可能となる高度の完成の段階との間の、非常に広い領域にわたることになる」ミル前掲, p52
- 114) ミル前掲, p16-22
- 115) 同, p42
- 116) ジョン・スチュアート・ミル『ミル自伝』岩

- 波文庫参照
- 117) デューイ『民主主義と教育上』松野安男訳 岩波文庫, p146
- 118) 同, p148 しかし、プラトンはアカデメイアを運営して、哲人支配者を育成するための教育と、基本的に同じような教育を実践していたわけであるから、理想国をただ待っていたとの批判は必ずしも妥当ではない。
- 119) 同, p149-160
- 120) 同, p152-157
- 121) 同, p158
- 122) デューイ『学校と社会』宮原誠一訳岩波文庫, p27
- 123) 『民主主義と教育下』 p178
- 124) ドイツの学校闘争については、潮木守一「19世紀末ドイツにおける教育過剰論争 <http://www.ushiogi.com/110223overreducinggermany.htm>
- 125) ポール・ウィルス『ハマータウンの野郎ども』熊沢誠訳 筑摩学芸文庫等
- 126) 『学校と社会』 p27-31
- 127) 同, p23
- 128) 同, p22
- 129) 『民主主義と教育上』 p223-224
- 130) 『学校と社会』 p162
- 131) Dewey “The Child and the Curriculum”
- 132) Ibid
- 133) 『学校と社会』 p60
- 134) バーチャルスクールこそ、21世紀の教育形態で、意図的な学習デザイン、質の高いカリキュラム、意味のある評価などが可能で、優れた教育効果を生み出すという見解もある。The North American Council for Online Learning and the Partnership for 21st Century Skills” Virtual Schools and 21st Century Skills”
- 135) Matthew Arnold ‘Democracy’ in “Mixed Essays” 1880 p1-7
- 136) Ibid p26
- 137) Matthew Arnold ‘Equality’ in “Mixed Essays” 1880 p51
- 138) アーノルド『教養と無秩序』多田英次訳 岩波文庫, p10
- 139) 同, p16-17
- 140) 同, p56
- 141) ベンタム主義は、人間社会の規則を供給するには、不十分であると批判する。同, p85 他方、鉄道建設や会堂の造営などに熱中する政治家も批判している。同, p82
- 142) 同, p148 アーノルドはプロシヤの学校制度を視察して、“Higher Schools and Universities in Germany” 1874という報告書を出版しているが、国家が運営する公立学校であることを高く評価している。P2-3
- 143) 同, p258
- 144) 『教養と無秩序』の翻訳者である多田英次氏も、解説で厳しく批判している。
- 145) 清瀧仁志「マシュー・アーノルドにおけるデモクラシーと教養」
- 146) S. ロスブラット『教養教育の系譜 アメリカ高等教育にみる専門主義との葛藤』吉田文・杉谷裕美子訳 玉川大学出版部, p54
- 147) ロスブラットによると、リベラル・エデュケーションの理念は、20世紀後期に結成された学生団体（友愛組織）に親和性があったとされる。その知的雰囲気、エリート意識を押し出した若者のシンボルになりやすかったということだろう。
- 148) Robert Hutchins “The Higher Learning in America” p4
- 149) Ibid p2 ハッチンズはおそらくこの部分でのみリベラル・アーツという言葉を使用しており、この後では専ら一般教育（general education）という言葉を使用している。しかもここではリベラル・アーツを現状についてだが、否定的なニュアンスで使用しており、やはり、彼の主張は、リベラル・アーツとは異なった一般教育だったといえる。この点、ハッチンズの基本がリベラル・エデュケーションだったとする鶴田義男の評価は肯定できない。鶴田義男『ロバート・メイナード・ハッチンズの生涯と教育哲学』近代文芸社, p246
- 150) Hutchins ibid p17
- 151) もっともハッチンズは、「職業主義は、大学にとっただけではなく、専門性にとってもま

ずいことである。」とも書いているので、職業教育そのものについても、かなり批判的な見解をもっていたといえる。ただし、ここでいう職業主義とは、大学は専ら職業のためになる教育を行う、卒業生はそうした経済的地位を求めて入学することを前提とするような体制を批判しているといえる。専門教育と結びついた職業教育は、実際にハッチنزの管理しているシカゴ大学でも大学院を中心として行われていた。Ibid p44

152) Ibid p66

153) Ibid p71

154) 三木は次のように欠いている。「あの第一次世界戦争という大事件に会いながら、私たちは政治に対しても全く無関心であった。あるいは無関心であることができた。やがて私どもを支配したのはかえってあの「教養」という思想である。そしてそれは政治というものを軽蔑して文化を重んじるという、反政治的ないし非政治的傾向をもっていた。それは文化主義的な考え方のものであった。あの「教養」という思想は文学的・哲学的であった。それは文学や哲学を特別に重んじ、科学とか技術とかいうものは「文化」には属しないで、「文明」に属するものと見られて軽んじられた。言い換えると、大正時代における教養思想は明治時代における啓蒙思想——福沢諭吉

などによって代表される——に対する反動として起こったものである。それがわが国において「教養」という言葉のもっている歴史的含蓄であって、言葉というものが歴史を脱することができないものである限り、今日においても注意すべき事実である。教育基本法には、「良識ある公民として必要な政治的教養は、教育上尊重されなければならない。」という文言があり、条文は異なっているが、新旧法とも内容は共通している。

155) 多少時代は遅くなるが、昭和12年に中谷宇吉郎は、「科学と文化」と題する随筆で、科学的な内容を一般に広めるための方策を提示している。『中谷宇吉郎随筆集』岩波文庫所収「科学技術・学術政策研究所」は多数の国民の科学に関する意識調査と科学教育や国民の科学意識、企業での活用などについて提言を行っている。しかし、何故科学教育に不十分性があるかの分析は十分に行われていない。「国民の科学技術に対する関心と科学技術に関する意識との関連」「科学技術理解増進と科学コミュニケーションの活性化について」「第10回科学技術予測調査」等。<http://www.nistep.go.jp/research/science-and-technology-foresight-and-science-and-technology-trends>

156) 竹内洋『教養主義の没落 変わりゆくエリート学生文化』中公新書参照